

〈覚書〉

植民地期朝鮮における農民層分解 —統計的検討を中心に—

河 合 和 男

はじめに

植民地期の朝鮮においては、農家の長男を中心とする大量の離村者が排出され、そしてそれを通じて朝鮮の農村や社会全体に大変動が引き起こされることになった。しかも、その離村者は朝鮮内の都市への移動だけでなく、「満州」への移動や日本への渡航をも余儀なくさせられるものであったことから、その及ぼした影響は朝鮮社会内部だけにとどまるものではなかった。それだけに、植民地期朝鮮における農民層分解について研究する意義は極めて大きいものがある。

ところが、従来の研究では、自作農や自小作農の減少と小作農の急増、および農家1戸当たりの耕地面積の減少といった農民層の全般的没落傾向が朝鮮全体の特徴として明らかにされてはいるものの、その分解傾向が植民地期を通じた朝鮮全体の特徴であるとされ、段階的な特徴や生産構造の異なる農業地帯別の農民層分解の特徴はないのかどうかについて体系的・構造的に分析したり、さらには農民層分解を研究する上で極めて重要な意味をもつ各農民階層（自作農、自小作農、小作農）別の自作地、小作地別経営面積の動向について言及した研究はこれまでほとんどなかったように思われる。周知のように、戦前期日本資本主義のもとでの農民層分解については数多くのすぐれた研究があり、その段階的・時期的特徴（大まかにいえば、1900年代までの両極分解傾向と、1900年代後半から30年代にかけての自小作前進と結びついた「中農標準化」傾向など）や地帯別特徴（《近畿型》地帯、《養蚕型》地帯、《東北型》地帯における差異）などが明らかにされているが、これに比べて、朝鮮における農民層分解についての日本の研究水準は著しく立ち遅れているといえよう。

この原因のひとつとして統計資料の絶対的不足とその不備があげられる。朝鮮で農業統計が一応の整備をみるのは、「土地調査事業」が終了した1918年以後のことである。だがそれも、

(1) 詳しくは、綿谷起夫「資本主義の発展と農民の階層分化」（東畑精一・宇野弘蔵編『日本資本主義と農業』岩波書店、1959年、所収）、中村政則「大恐慌と農村問題」（『岩波講座 日本歴史19』岩波書店、1976年、所収）、川東埜弘「農民層分解の地帯類型と地主制の後退」（山崎隆三編『両大戦間期の日本資本主義』（上巻）大月書店、1978年、所収）などを参照されたい。

例えば朝鮮総督府編『農業統計表』には、各農民階層別の自作地、小作地別経営面積の統計が掲載されておらず、また33年以後になると調査方式が変更されて、地主甲（所有する耕地をすべて小作に出し、自らは耕作しない地主）と地主乙（所有する耕地の大部分を小作させ、残り一部を自耕作する地主）との区分がなくなり、しかも地主甲が統計から削除されるとともに、地主乙も自作農の中に編入されてしまうといった欠陥がある。そのため、長期にわたっての正確な累年比較はできない。しかも、この『農業統計表』はおそらく各道単位の農業統計にもとづいて作成されたものであろうが、これらは第二次世界大戦中の混乱と日本の敗戦によって散失し、各道で編まれた毎年の農業統計資料を日本ですべて見つけることは現在のところ不可能な状況となっているのである。

本稿は、朝鮮全体の動向を概観するとともに、筆者がこれまで蒐集したいくつかの道単位の農業統計資料にもとづいて農業地帯別の農民層分解の特徴を、各農民階層別の1戸当たりの自作地、小作地別経営面積の推移をも検討の視野に入れて考察しようとするものである。ただし、体系的・構造的な研究のためには、各農家階層の具体的な経営分析とともに、朝鮮における各農業地帯ごとの構造的変化やそのもとでの地主制の存在形態⁽²⁾、さらには農産物の商品化の中心をなした米の流通機構やその価格形成の植民地的特殊性⁽³⁾などに関連づけて分析することが不可欠である。さらに、両大戦間期が朝鮮においては1919年の全民族的蜂起である「三・一独立運動」の勃発や20年からの大規模な「産米増殖計画」の実施、昭和恐慌からの打撃をまともに受けた農業恐慌、31年の「満州事変」以後のいわゆる15年戦争のもとでの大陸兵站基地化政策の遂行など、政治的・経済的・社会的大変動期にあたっていることから、それらを踏まえた分析視角が必要とされよう。だが、これらの点については今後の課題としたい。したがって、ここでは農民層分解についての単なる統計的検討を行ない、その考察は極めて断片的で現象的把握にとどまらざるを得ないことを最初にことわっておきたい。その意味で、本稿は本格的な研究を行なう上での基礎的な準備作業にすぎない。

I 朝鮮全体の動向

農業地帯別に検討する前に、朝鮮全体の農業生産構造とそのもとでの農民層分解について概観しておこう。

表1は農産物の作付面積の推移をみたものである。これによると、米の作付面積が一貫して

(2) 朝鮮における日本人の地主化過程とその存在構造については、浅田喬二『日本帝国主義と旧植民地地主制』御茶の水書房、1968年を、また朝鮮人地主の存在形態については、特に朝鮮南部に焦点を当てて地帯構造論的アプローチから分析している宮嶋博史「植民地朝鮮人大地主の存在形態に関する試論」（飯沼二郎・姜在彦編『植民地期朝鮮の社会と抵抗』未来社、1982年、所収）を参照されたい。

(3) この点については、林炳潤『植民地における商業的農業の展開』東京大学出版会、1971年、拙著『朝鮮における産米増殖計画』未来社、1986年を参照されたい。

表1 農産物作付面積の推移

(単位; 町歩, カッコ内は構成比%)

	1918年	1921年	1924年	1927年	1930年	1933年
米	1,548,170 (28.31)	1,531,546 (27.24)	1,575,716 (27.59)	1,602,332 (27.22)	1,662,020 (27.43)	1,697,464 (27.26)
大 麦	790,851 (14.47)	807,435 (14.36)	812,418 (14.22)	837,214 (14.23)	893,932 (14.75)	888,821 (14.27)
小 麦	344,380 (6.30)	357,390 (6.36)	360,895 (6.32)	366,027 (6.22)	346,080 (5.71)	322,217 (5.17)
裸 麦	56,749 (1.04)	52,828 (0.94)	54,470 (0.95)	56,427 (0.96)	78,038 (1.29)	124,581 (2.00)
豆	743,461 (13.59)	789,027 (14.03)	798,829 (13.99)	793,629 (13.49)	792,979 (13.09)	803,851 (12.90)
小 豆	267,338 (4.89)	262,622 (4.67)	257,394 (4.51)	251,290 (4.27)	241,114 (3.98)	232,771 (3.74)
緑 豆	32,197 (0.59)	33,949 (0.60)	35,791 (0.63)	38,954 (0.66)	41,618 (0.69)	38,891 (0.62)
その他	35,329 (0.65)	22,863 (0.41)	21,855 (0.38)	19,963 (0.34)	20,574 (0.34)	19,372 (0.31)
雑 穀	758,233 (13.86)	779,038 (13.86)	774,273 (13.56)	793,676 (13.49)	790,815 (13.05)	797,238 (12.80)
稗	114,433 (2.09)	122,511 (2.18)	109,381 (1.92)	97,711 (1.66)	85,856 (1.42)	73,746 (1.18)
黍	14,928 (0.27)	17,056 (0.30)	17,153 (0.30)	16,745 (0.28)	16,474 (0.27)	15,250 (0.24)
蜀黍	93,538 (1.71)	100,357 (1.78)	99,038 (1.73)	96,790 (1.64)	93,573 (1.54)	86,423 (1.39)
玉蜀黍	84,188 (1.54)	91,695 (1.63)	93,446 (1.64)	102,534 (1.74)	107,956 (1.78)	112,728 (1.81)
燕 麦	96,174 (1.76)	109,224 (1.94)	116,891 (2.05)	111,069 (1.89)	110,232 (1.82)	119,147 (1.91)
蕎 麦	95,773 (1.75)	100,282 (1.78)	104,960 (1.84)	108,582 (1.85)	107,997 (1.78)	107,341 (1.72)
棉	130,419 (2.38)	147,738 (2.63)	170,438 (2.98)	205,080 (3.48)	192,874 (3.18)	176,659 (2.84)
大 麻	26,359 (0.48)	28,454 (0.51)	29,249 (0.51)	29,914 (0.51)	29,005 (0.48)	27,279 (0.44)
苧 麻	1,158 (0.02)	1,292 (0.02)	1,408 (0.02)	1,593 (0.03)	1,570 (0.03)	1,525 (0.02)
楮	— (—)	3,340 (0.06)	5,172 (0.09)	6,056 (0.10)	6,902 (0.11)	7,111 (0.11)
其他	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
特 用 作物	2,768 (0.05)	3,103 (0.06)	3,308 (0.06)	3,779 (0.06)	3,952 (0.07)	3,993 (0.06)
苳 草	7,349 (0.13)	8,653 (0.15)	8,903 (0.16)	9,508 (0.16)	9,788 (0.16)	10,042 (0.16)
胡 麻	14,336 (0.26)	14,048 (0.25)	13,923 (0.24)	14,200 (0.24)	13,747 (0.23)	13,529 (0.22)
苳	— (—)	— (—)	— (—)	3,096 (0.05)	3,021 (0.05)	3,416 (0.05)
其他	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
甘 藷	10,100 (0.18)	11,490 (0.20)	11,118 (0.19)	11,700 (0.20)	13,955 (0.23)	18,940 (0.30)
馬 鈴 薯	63,192 (1.16)	76,269 (1.36)	73,600 (1.29)	77,396 (1.32)	89,902 (1.48)	98,306 (1.58)
蔬 菜 類	35,977 (0.66)	38,607 (0.69)	39,432 (0.69)	41,946 (0.71)	43,626 (0.72)	46,724 (0.75)
白 菜	50,839 (0.93)	54,137 (0.96)	56,195 (0.98)	58,235 (0.99)	59,130 (0.98)	116,196 (1.87)
その他	27,487 (0.50)	24,387 (0.43)	31,316 (0.55)	70,981 (1.21)	125,868 (2.08)	185,020 (2.97)
緑 肥	23,186 (0.42)	33,153 (0.59)	34,196 (0.60)	58,817 (1.00)	76,073 (1.26)	79,169 (1.27)
合 計	5,468,912	5,622,494	5,710,768	5,885,244	6,058,671	6,227,750

資料) 朝鮮総督府編『農業統計表』1939年版。

第1位を占め、全体の27%から28%台という高い比率を維持している。次いで多いのが大麦で、14%台を終始維持している。第3位と第4位を占めているのが大豆と大麦で、それぞれ総作付面積の12.9～14.2%、12.9～14.1%となっている。第2位から第4位までの作物の占める比率にはそれほど差はない。以下、比率は小さくなるが、小麦(5.2～6.4%)、小豆(3.7～4.9%)が続いている。特用作物では棉が目立つ程度である(2.4～3.7%)。いずれの主要作物の作付面積の比率も年によって若干の変動があるものの、順位に変化はない。強いていうならば、大豆、粟、小麦、小豆の占める比率が1930年以後若干低下していることぐらいであろう。

また、表2によって各農作物の生産額の推移をみると、米が圧倒的な地位を占めている。1928年から30年までは、全体に占める比率が50%未満となつてはいるが、それ以外の年はいずれも50%を超えている。作付面積よりも生産額において米の占める地位がはるかに高いのは、米の商品価値が極めて高いことを意味している。その他の作物は米と比べてかなり小さい。大麦(7.1～11.0%)、大豆(5.9～9.3%)、粟(5.5～8.4%)、小麦(2.1～4.4%)、棉(1.2～3.9%)、小豆(1.5～2.7%)などがその他の主要作物であるが、第2位の大麦でさえ生産額では米の5分の1以下にすぎない。またこの表からは、第3位以下の順位に変動があるということと、年によって各農作物の占める比率の変動幅がかなり大きいということを指摘することができよう。

以上のように、朝鮮農業における米作の地位は極めて高いことがわかる。このことから、植民地期に朝鮮農業は米作モノカルチャー化が著しく進展していったとする見解が通説となっている。なるほど、作付面積、生産額の双方からみて米は圧倒的比重を占めている。だが、表1、表2からだけでは植民地期を通じて米作モノカルチャー化が一層進展していったとはいえないように思われる。

この点について、農業経営の多様性を示す1つの指標として、かつてアメリカの農業経済学者L.C.グレイが提唱した「多様度指数」(Diversity Index)というものがある⁽⁴⁾。これは、1未満の正の数の平方はもとの正の数よりも小さくなるという性質を利用した簡単な指数であるが、まず各農産物の生産額(作付面積)の、総生産額(総作付面積)に対する割合を求め、これをさらに平方して得られた数の総和でもって1を除いたものである。例えば、生産部門が全部で n として、その生産額(作付面積)がそれぞれ $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ 、総生産額(総作付面積)を S_n ($S_n = a_1 + a_2 + a_3 + \dots + a_n$) とすると、多様度指数は、

$$\frac{1}{\left(\frac{a_1}{S_n}\right)^2 + \left(\frac{a_2}{S_n}\right)^2 + \left(\frac{a_3}{S_n}\right)^2 + \dots + \left(\frac{a_n}{S_n}\right)^2}$$

となる。したがって、農業生産部門の数とそれらの重要度とによって、多様度指数には大きな差が生じ、完全に1つの作物だけを生産し

(4) L. C. Gray; *Introduction to Agricultural Economics*, 1927, pp62-63.

表2 農業生産額の推移

		(単位; 千円, カッコ内は構成比%)					
		1918年	1921年	1924年	1927年	1930年	1933年
米		403,914 (51.40)	361,127 (50.84)	436,818 (50.07)	434,545 (52.24)	251,646 (49.80)	341,590 (51.59)
麦		65,693 (8.36)	57,608 (8.11)	74,569 (8.55)	62,095 (7.46)	55,780 (11.04)	47,787 (7.22)
小麦		28,718 (3.65)	31,276 (4.40)	35,000 (4.01)	26,078 (3.13)	18,424 (3.65)	18,219 (2.75)
裸麦		6,522 (0.83)	4,590 (0.65)	5,942 (0.68)	4,814 (0.58)	5,804 (1.15)	10,050 (1.52)
大豆		66,367 (8.45)	61,420 (8.65)	61,620 (7.06)	61,686 (7.42)	31,439 (6.22)	44,001 (6.65)
小豆		20,986 (2.67)	14,242 (2.01)	15,873 (1.82)	15,556 (1.87)	7,971 (1.58)	11,417 (1.72)
緑豆		2,034 (0.26)	2,017 (0.28)	1,660 (0.19)	2,128 (0.26)	1,276 (0.25)	1,751 (0.26)
その他		5,038 (0.64)	1,223 (0.17)	1,168 (0.13)	1,558 (0.19)	754 (0.15)	910 (0.14)
粟		50,124 (6.38)	50,067 (7.05)	73,650 (8.44)	58,627 (7.05)	36,531 (7.23)	40,315 (6.09)
稗		6,189 (0.79)	5,617 (0.79)	6,390 (0.73)	4,678 (0.56)	3,062 (0.61)	2,943 (0.44)
黍		1,148 (0.15)	837 (0.12)	1,392 (0.16)	1,173 (0.14)	649 (0.13)	762 (0.12)
蜀黍		7,476 (0.95)	5,820 (0.82)	8,424 (0.97)	7,525 (0.90)	3,935 (0.78)	4,584 (0.69)
玉蜀黍		5,846 (0.74)	3,258 (0.46)	5,723 (0.66)	5,262 (0.63)	2,941 (0.58)	4,459 (0.67)
燕麦		5,217 (0.66)	4,197 (0.59)	3,857 (0.44)	4,126 (0.50)	2,280 (0.45)	2,586 (0.39)
蕎麦		6,368 (0.81)	5,540 (0.78)	7,183 (0.82)	6,913 (0.83)	3,635 (0.72)	3,910 (0.59)
棉		18,693 (2.38)	11,958 (1.68)	34,034 (3.90)	27,042 (3.25)	14,146 (2.80)	19,867 (3.00)
大麻		8,438 (1.07)	9,931 (1.40)	10,775 (1.24)	9,136 (1.10)	5,386 (1.07)	5,451 (0.82)
苧麻		712 (0.09)	901 (0.13)	1,048 (0.12)	703 (0.08)	347 (0.07)	603 (0.09)
楮		— (—)	3,449 (0.49)	3,114 (0.36)	1,608 (0.19)	725 (0.14)	1,071 (0.16)
莞草		734 (0.09)	900 (0.13)	1,249 (0.14)	1,315 (0.16)	853 (0.17)	899 (0.14)
胡麻		762 (0.10)	1,043 (0.15)	1,036 (0.12)	1,188 (0.14)	660 (0.13)	799 (0.12)
柞		980 (0.12)	968 (0.14)	1,438 (0.16)	1,127 (0.14)	596 (0.12)	732 (0.11)
人参		808 (0.10)	3,500 (0.49)	2,271 (0.26)	2,459 (0.30)	2,277 (0.45)	1,983 (0.30)
煙草		5,866 (0.76)	3,413 (0.48)	4,321 (0.50)	6,602 (0.79)	4,592 (0.91)	4,862 (0.73)
その他		— (—)	— (—)	68 (0.01)	142 (0.02)	454 (0.09)	854 (0.13)
甘藷		5,466 (0.70)	7,174 (1.01)	6,966 (0.80)	9,505 (1.14)	4,552 (0.90)	5,771 (0.87)
馬鈴薯		29,675 (3.78)	26,010 (3.66)	24,591 (2.82)	18,435 (2.22)	12,010 (2.38)	13,617 (2.06)
蔬菜		13,648 (1.74)	11,240 (1.58)	14,914 (1.71)	20,323 (2.44)	9,393 (1.86)	17,474 (2.64)
その他		15,318 (1.95)	15,219 (2.14)	19,641 (2.25)	24,576 (2.95)	10,537 (2.09)	35,438 (5.35)
果実		2,463 (0.31)	5,197 (0.73)	6,974 (0.80)	6,828 (0.82)	6,268 (1.24)	9,055 (1.37)
緑肥		619 (0.08)	537 (0.08)	702 (0.08)	4,111 (0.49)	6,411 (1.27)	8,396 (1.27)
合計		785,823	710,279	872,411	831,864	505,335	662,156

資料) 表1と同じ。

ている場合には1となり、また経営の多様化が進展するにつれてその指数は大きくなる。

表3は、表1および表2の農作物の項目数とその構成比から算出した朝鮮全体の農業経営に関する多様度指数である（なお、その作成にあたっては、構成比およびその平方はそれぞれ小数第6位まで求めている）。これによると、多様度指数は、生産額からみると、1918年 3.47、23年3.49、28年4.05、33年3.49であり、また作付面積からみると、それぞれ6.77、7.01、7.44、

表3 多様度指数の推移

年	作付面積からみた多様度指数	農業生産額からみた多様度指数
1918	6.7663	3.4748
1919	6.8599	3.1402
1920	6.8719	3.3434
1921	6.9996	3.5344
1922	6.9587	3.3226
1923	7.0087	3.4918
1924	6.9687	3.6252
1925	7.0309	3.4793
1926	7.1285	3.2758
1927	7.1454	3.4010
1928	7.4381	4.0456
1929	7.1750	3.9935
1930	7.1591	3.6504
1931	7.2856	3.2434
1932	7.3596	3.6510
1933	7.3467	3.4921

7.35であって、農業経営の多様化の進展が遅々としていたとはいえても、米穀単作経営化が植民地期に一層進展していったとはいえないようである（ただし、このことがすべての道や農民階層について妥当するものであるということの意味しない）。むしろ、植民地期を通じて米生産の占める割合が高水準に維持されていたことのほうが重要であろう。そして、それによって日本への米のモノ・エクスポート化が促されたのである⁽⁵⁾。

以上のように、植民地期の朝鮮においては米作中心の農業経営が維持されてきたが、ではそ

資料) 表1、表2から作成。

のもとでの農民層分解はどのようなものであったのであろうか。次にこの点についてみてみよう。

まず、耕作地を自作地、小作地別にみた表4によって土地所有状況をみてみよう。この表から、次の点を指摘することができる。

(1)「土地調査事業」が終了し、農業統計が一応整備された1918年時点で、すでに小作地面積は219万町歩で、火田（焼畑のこと）15.4万町歩を除く耕地面積434.2万町歩の50.4%を占めている。そのうち畚（水田のこと）の小作地面積と小作地率は99.8万町歩、64.6%で、また田（畑のこと）の場合はそれぞれ119.1万町歩、42.6%であった。日本の場合、小作地率は20年

(5) 朝鮮では米を中心に日本へのモノ・エクスポート化が著しく進展している。例えば、米の生産額のうちで輸移出額が占める比率は1915～17年平均の14.9%、20～22年平均の20.0%から、25～27年平均の35.9%、30～32年平均の42.3%へと急速に高まり、またそのほとんど（99.8%）が日本への移出によって占められている。さらに、総輸移出額に占める米のウェイトもそれぞれ36.9%、42.1%から52.4%、46.9%へと高くなっている。これらの点については、前掲拙著134～136、140～141ページを参照されたい。

表4 自作地、小作地別耕地面積

年	面積(町歩)												小作地率		
	畓				田				計				畓	田	計
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計			
1918	546,141	998,290	1,544,430	1,606,364	1,191,297	2,797,661	2,152,505	2,189,587	4,342,091	64.6	42.6	50.4			
1919	547,868	995,222	1,543,090	1,603,663	1,177,926	2,781,590	2,151,531	2,173,148	4,324,679	64.5	42.3	50.2			
1920	550,853	992,849	1,543,702	1,576,037	1,202,296	2,778,333	2,126,890	2,195,145	4,322,035	64.3	43.2	50.8			
1921	557,938	985,727	1,543,664	1,592,028	1,186,798	2,778,826	2,149,966	2,172,524	4,322,490	63.9	42.7	50.3			
1922	551,522	993,601	1,545,123	1,582,710	1,189,485	2,772,195	2,134,232	2,183,086	4,317,318	64.3	42.9	50.6			
1923	550,198	999,264	1,549,461	1,590,820	1,180,583	2,771,403	2,141,018	2,179,846	4,320,864	64.5	42.6	50.4			
1924	548,073	1,005,926	1,553,998	1,592,212	1,175,995	2,768,207	2,140,284	2,181,920	4,322,205	64.7	42.5	50.5			
1925	548,209	1,015,528	1,563,736	1,601,418	1,183,201	2,784,619	2,149,627	2,198,728	4,348,355	64.9	42.5	50.6			
1926	549,680	1,024,477	1,574,157	1,607,214	1,197,586	2,804,800	2,156,894	2,222,063	4,378,956	65.1	42.7	50.7			
1927	555,513	1,031,541	1,587,053	1,493,406	1,307,268	2,800,674	2,048,919	2,338,809	4,387,727	65.0	46.7	53.3			
1928	550,194	1,048,029	1,598,224	1,463,749	1,329,422	2,793,171	2,013,944	2,377,451	4,391,395	65.6	47.6	54.1			
1929	547,486	1,061,402	1,608,888	1,422,977	1,360,250	2,783,228	1,970,463	2,421,652	4,392,116	66.0	48.9	55.1			
1930	543,600	1,074,096	1,617,696	1,405,328	1,365,640	2,770,968	1,948,928	2,439,736	4,388,664	66.4	49.3	55.6			
1931	535,439	1,093,545	1,628,984	1,383,498	1,372,028	2,755,526	1,918,937	2,465,573	4,384,510	67.1	49.8	56.2			
1932	538,584	1,108,425	1,647,009	1,369,954	1,373,480	2,743,434	1,908,538	2,481,905	4,390,443	67.3	50.1	56.5			

資料) 朝鮮總督府編『農業統計表』1932年版。

注) 土地台帳未登録耕地見積り面積(畓、田および火田)を含んでいない。

時点で全耕地で46.3%、田で51.7%、畑で40.8%であった。⁽⁶⁾このことから、朝鮮は日本に比べて地主的土地所有が一段と進展していたといえるであろう。

(2) 畚についてみると、耕地面積は1922年以降一貫して増大している。そのうち、自作地は27年までは明確な傾向を示してはいないが(21年までの増大、22年から24年までの減少、25年から27年までの増大という動きを示す)、28年以降は減少している。それに対して、小作地面積は21年までは減少しているが、早くも22年以降増大に転じている。その結果、小作地率も21年を底としてその後はほぼ一貫して上昇している。

(3) 田の耕地面積は25年、26年を例外としていずれの年も前年よりも少なくなっている。このことは、田から畚への地目変換がかなり行なわれたことを示すものであろう。自作地は22年から26年までは増大しているが、27年以降は減少に転じている。また小作地は20年から24年までは減少傾向にあるが、それ以降は増大に転じている。この結果、25年までは減少傾向にあった小作地率は26年以降になると急激に増大している。

(4) 全耕地では、自作地は1926年をピークにそれ以降は急激に減少している。また、小作地は23年を底として、それ以降はほぼ一貫して増大している。小作地面積は23年から32年までの10年間に30.2万町歩も増加し、しかもそれは総耕地面積の増加を上まわっているため、小作地率も23年の50.4%から32年の56.4%へと6.0ポイントも上昇している。

以上のことをまとめると、朝鮮における地主的土地所有は日本と比べて一段と進展しており、そのことはとりわけ畚についてあてはまるということ、そして畚については20年代前半以降に、また田および全耕地については20年代後半以降に地主的土地所有が一段と進展していったということができよう。

次に、表5で農家の階級構成の推移をみると、次のような点を指摘することができる。

(1) 地主甲(不耕作地主)は1920年を例外として終始一貫して増大している。とりわけ、30年代に入ってから増大は著しい。また、地主乙(耕作地主)は27年までは増大しているが、それ以降は減少に転じている。このことは、20年代後半以降になると手作地主から不耕作地主への推転がみられるということの意味している。なお、表4と合わせて検討すると、18年には全農家の3.1%を占めるにすぎない地主層が全耕地の50.4%(畚64.6%、田42.6%)を所有し、32年には全農家の3.6%を占めるにすぎない地主層が全耕地の56.4%(畚67.4%、田49.8%)を所有していることになる。

(2) 自作農については、1920年代中葉までは戸数・比率ともに緩慢な減少しか示さないか、あるいは逆に増大している場合もみられるのであるが、25年をピークに減少へと転じている。

(3) 自作小農は、戸数では1919年、27年、30年、比率では27年を例外として減少傾向を示している。特に、32年の減少は際立っている。

(6) 安藤良雄編『近代日本経済史要覧』東京大学出版会、1975年、16ページ。

表5 農家階級構成の推移

年	戸数										構成比(%)								
	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	純火田民	兼火田民	専業	兼業	合計	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	純火田民	兼火田民	専業	兼業
1918	15,731	65,810	523,332	1,043,836	1,003,775			2,201,923	450,561	2,652,484	0.6	2.5	19.7	39.4	37.8			83.0	17.0
1919	16,274	74,112	525,830	1,045,606	1,003,003			2,197,147	467,678	2,664,825	0.6	2.8	19.7	39.2	37.6			82.4	17.6
1920	15,655	75,365	529,177	1,017,780	1,082,842			2,254,584	466,235	2,720,819	0.6	2.8	19.5	37.4	39.8			82.9	17.1
1921	17,002	80,103	533,188	994,976	1,091,680			2,256,920	460,029	2,716,949	0.6	3.0	19.6	36.6	40.2			83.1	16.9
1922	17,157	81,926	534,907	971,877	1,106,598			2,245,255	467,210	2,712,465	0.6	3.0	19.7	35.8	40.8			82.8	17.2
1923	17,904	82,498	527,494	951,667	1,123,275			2,220,000	482,835	2,702,838	0.7	3.1	19.5	35.2	41.6			82.1	17.9
1924	18,663	83,520	525,689	934,208	1,142,192			2,231,801	472,471	2,704,272	0.7	3.1	19.4	34.6	42.2			82.5	17.5
1925	19,735	83,832	544,536	910,178	1,184,422			2,262,078	480,625	2,742,703	0.7	3.1	19.9	33.2	43.2			82.5	17.5
1926	20,571	84,043	525,747	895,721	1,193,099	34,316	59,683	2,289,924	463,573	2,753,497	0.8	3.1	19.1	32.5	43.3	1.3	2.2	83.2	16.8
1927	20,737	84,359	519,389	909,843	1,217,889	29,131	90,558	2,373,000	408,348	2,781,348	0.8	3.0	18.7	32.7	43.8	1.1	3.3	85.3	14.7
1928	20,777	83,824	510,983	894,381	1,255,954	33,269	94,485	2,439,990	359,198	2,799,188	0.7	3.0	18.3	32.0	44.9	1.2	3.4	87.2	12.8
1929	21,326	83,170	507,384	885,594	1,283,471	34,332	92,710	2,476,004	339,273	2,815,277	0.8	3.0	18.0	31.5	45.6	1.2	3.3	87.9	12.1
1930	21,400	82,604	504,009	890,291	1,334,139	37,514	96,508	2,536,347	333,610	2,869,957	0.8	2.9	17.6	31.0	46.5	1.3	3.4	88.4	11.6
1931	23,013	81,691	488,579	853,770	1,393,424	41,212	96,466	2,577,525	304,164	2,881,689	0.8	2.8	17.0	29.6	48.4	1.4	3.4	89.4	10.6
1932	32,890	71,933	476,351	742,961	1,546,456	60,497	96,214	2,734,393	196,695	2,931,088	1.1	2.5	16.3	25.4	52.8	2.1	3.3	93.3	6.7

資料) 表4と同じ。

注) 兼火田民とは熟田の耕作とともに、火田(焼畑)式の耕作方法による耕作も併せて行なう者。地主、自小作農、小作農の中に計上されている。

(4) 小作農は戸数・比率ともに1919年を唯一の例外として終始一貫して増大し、21年からは総農家戸数の40%以上を占めるようになった。さらに32年には過半を占めるに至っている。

(5) 1926年から新たに統計に加えられることになった純火田民，兼火田民は増大傾向にあり，その比率も両者を合わせて26年の3.4%から32年の5.3%へと高くなっている。

(6) 農家を専業と兼業に分類すると，1924年以降専業が増大に転じ，逆に兼業は27年以降減少するに至っている。このことは，他の就業機会の減少を意味している。

以上をまとめると，農家階級構成についての変化は1920年代後半にあらわれていることである。それは，手作地主から不耕作地主への推転と，自作農，自小作農から小作農への転落にあらわれている。後者について，日本では1900年代後半から30年代にかけて自作農と小作農の減少，および自小作農の増大がみられたのと極めて対照的である。

次に，表6で農家1戸当たり耕地面積の推移をみてみよう。この表は耕地面積を農家戸数で

表6 農家1戸当たりの耕地面積

(単位；町歩)

年	畓			田			計		
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計
1918	0.207	0.379	0.586	0.609	0.452	1.061	0.816	0.830	1.647
1919	0.207	0.376	0.583	0.605	0.445	1.050	0.812	0.821	1.633
1920	0.204	0.367	0.571	0.583	0.444	1.027	0.786	0.811	1.598
1921	0.207	0.365	0.572	0.590	0.440	1.029	0.796	0.805	1.601
1922	0.205	0.369	0.573	0.587	0.441	1.029	0.792	0.810	1.602
1923	0.205	0.372	0.577	0.592	0.440	1.032	0.797	0.812	1.609
1924	0.204	0.375	0.579	0.593	0.438	1.031	0.797	0.812	1.609
1925	0.201	0.373	0.574	0.588	0.435	1.023	0.789	0.807	1.597
1926	0.204	0.380	0.583	0.596	0.444	1.039	0.799	0.823	1.623
1927	0.203	0.378	0.581	0.547	0.479	1.025	0.750	0.856	1.606
1928	0.200	0.382	0.582	0.533	0.484	1.017	0.734	0.866	1.600
1929	0.198	0.385	0.583	0.516	0.493	1.009	0.714	0.878	1.592
1930	0.193	0.382	0.575	0.500	0.486	0.986	0.693	0.868	1.561
1931	0.190	0.388	0.578	0.491	0.487	0.978	0.681	0.875	1.556
1932	0.190	0.391	0.580	0.483	0.484	0.967	0.673	0.875	1.547

資料) 表4と同じ。

注) (1) 土地台帳未登録耕地見積り面積を含んでいない。

(2) 求めるさいの農家戸数については，地主甲，純火田民を含んでいない。

(7) 同上書，15ページ参照。

除したものであって、各農家階層の経営面積の推移を示したものではないが、一応の傾向を知ることができよう。なお、表には不耕作地主である地主甲はもちろん、1918年以降統計に掲載されるようになった火田面積と、26年以降統計に掲載されるようになった純火田民を除去して求めており、累年比較ができるようにしてある。

畝については全体では増減の明確な傾向を示していないが、自作地では1921年をピークに減少に転じている（26年、27年を除く）。それに対して、小作地は21年を底としてそれ以降増加している（25年、27年を除く）。このことは、農家が自作畝の減少を小作畝の拡大によって全体としての耕地面積を維持していることを示している。

田については、自作地では1920年から26年まではほぼ一定の水準を維持したものの、27年以降は急激に減少している。それに対して、小作地では25年までは減少、26年から29年までは増大、30年以降は再び減少するという動きを示す。しかも、26年から29年までの増加も自作地の減少分を補うほどではなく、全体的には減少傾向にある。

この結果、農家1戸当たりの耕地面積は1926年までは増加傾向にあるものの（25年を除く）、それ以降は減少の一途をたどっている。すなわち、20年代後半以降になると自作地の減少によって農家の経営状態が一層悪化していつているのである。

なお、時期はやや下るが、1938年時点における各農民階層別の経営規模をみておこう。表7から次のことを指摘することができる。⁽⁸⁾

(1) 各農民階層とも耕作規模が小さくなるにつれて農家戸数が多くなり（ただし、自作農は5反以下層に次いで多いのは2町歩以上層である。これはより実証的に検討しなければ断定できないが、1938年時点ではすでに地主乙が自作農に編入されていることにもよるものと思われる

表7 各農家階層の耕作規模別構成比（1938年）

	5反以下	5反～1町	1町～2町	2町以上	計
自作農	30.1	21.1	21.1	27.9	100.0
自小作農	34.9	25.6	22.2	17.5	100.0
小作農	43.3	25.8	18.0	12.9	100.0
計	38.4	24.9	19.7	17.0	100.0

資料) 崔在錫『韓国農村社会研究』(伊藤亜人, 嶋陸奥彦訳, 学生社, 1979年) 353ページ。

ただし、原資料は『朝鮮総督府調査月報』第9巻第11号, 1938年11月。

る)、いずれも耕作規模5反以下層が最大の比率を占めている。

(2) 各農民階層とも1町歩未満の農家が過半を占めている。自作農で51.2%, 自小作農で60.5%, 小作農では69.1%となっており、全体でも63.3%にも達している。これは、表6と同じ方法によって得られる自作農, 自小作農, 小作農を合わせた1938年時点の1戸当たりの平均耕

(8) この点については、崔在錫『韓国農村社会研究』(伊藤亜人, 嶋陸奥彦訳, 学生社, 1979年)353ページも参照。

地面積 1.576 町歩，さらに被傭者（耕地をまったく所有せず，他の農家に雇用されて農業に従事し独立の生計を立てている者）を加えた 1 戸当たり平均耕地面積 1.515 町歩⁽⁹⁾とも著しく乖離しており，1 戸当たりの耕地面積から類推されるものよりもはるかに農家の現実の経営状態が厳しかったことを意味している。

(3) 一般的に自作農，自小作農，小作層へとうつるにつれて経営規模の小さい農家が多くなっているが，自小作農やさらには自作農といえども小作農よりも耕作規模のかなり小さい層が多く存在している。小作関係農家（自小作農，小作農）が地主によって徴収される小作料その他は平均して収穫高の約 55% であるが，この点を考慮しても，小作関係農家よりも経営状態の悪い自作農が広範に存在しているのである。

以上，本節では兩大戦間期における朝鮮全体の農業生産構造についてみてきた。そこでは，米作中心の農業経営が維持されてきたが，地主的土地所有は 1920 年代後半に一段と進展し，また同時に各農民階層の経営状態も悪化していったことが確認できた。しかも，各階層の経営状態は農家 1 戸当たりの平均耕地面積から類推される経営状態よりもはるかに悪かったのである。それでは，各農業地帯においてどのような農民層分解の特徴がみられるのであろうか。次節でこの点について検討してみよう。

II 農業地帯別の農民層分解

朝鮮における農業生産構造は，図 1 の概略図からもうかがわれるように，地域によってかなり異なっている。印貞植氏はこれを田作地帯，畚・田混淆地帯，畚作地帯に分類し⁽¹⁰⁾，また久間健一氏は高原地帯，山岳地帯，畑作地帯，稲作地帯，島嶼地帯に区分し，さらに各地帯をいくつかの地域・地区に細分し⁽¹¹⁾，その上で詳細な実態調査研究を行なっている。

印貞植氏によれば，畚・田の耕地面積比率および各農作物の生産比率からみて，各農業地帯はそれぞれ次のような特徴を

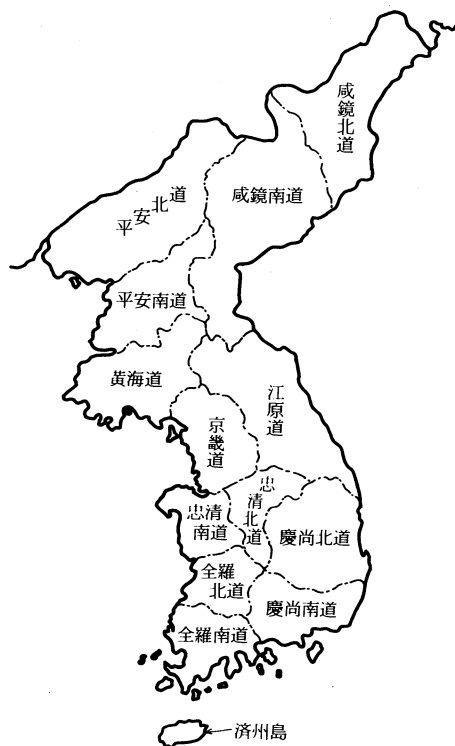


図 1 朝鮮概略図

(9) 朝鮮総督府編『農業統計表』(1939年版) 5～8 ページ。

(10) 印貞植『朝鮮の農業地帯』生活社，1940年。

(11) 久間健一『朝鮮農業経営地帯の研究』農林省農業総合研究所，1950年。なお，同書は，久間氏が植民地時代の朝鮮で小作官をしていた時に蒐集した膨大な調査資料にもとづいている。

表8 地帯別耕種組織 (単位;100町,%) 1934年~36年平均

		稲 作		麦 類		豆 類		雑 穀 類		特用作物		根菜類その他	
		面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率
畚作地帯	全羅南道	1,984	32.1	1,804	29.2	332	5.4	509	8.2	582	8.4	975	15.7
	全羅北道	1,693	47.8	873	24.7	428	12.0	—	—	116	3.1	434	12.3
	慶尚南道	1,744	37.0	1,806	38.3	334	7.1	—	—	310	6.6	522	11.0
	慶尚北道	1,892	29.6	2,484	38.8	899	14.1	446	7.0	255	4.0	408	6.5
	忠清南道	1,606	50.2	781	24.4	438	13.7	—	—	140	4.4	133	7.3
	京畿道	1,985	40.2	1,184	24.0	1,030	21.0	404	8.2	80	1.6	243	5.0
畚・田混濁地帯	忠清北道	696	29.3	843	35.4	394	16.5	166	7.0	159	6.7	131	5.1
	江原道	881	20.6	724	16.9	977	22.9	1,362	31.8	—	—	340	7.8
	黄海道	1,338	19.0	1,461	20.7	1,740	24.1	2,108	30.0	218	3.1	180	2.5
田作地帯	平安南道	856	17.8	683	14.1	989	20.6	1,840	38.2	273	5.7	184	3.7
	平安北道	932	19.4	55	1.1	1,116	23.2	2,320	48.3	146	3.1	137	4.9
	咸鏡南道	590	11.8	452	9.1	939	18.8	2,298	46.3	—	—	700	14.0
	咸鏡北道	169	6.5	467	17.9	761	29.2	1,002	38.3	—	—	212	8.1

資料) 印貞植『朝鮮の農業地帯』生活社, 1940年, 43~44ページ。

注) 原資料は, 久間健一氏の調査にもとづくもの。

もっている(表8をも参照)⁽¹²⁾。

(1) 田作地帯 — 豆・粟・馬鈴薯地帯。朝鮮西部の平安南道・北道, 北部の咸鏡南道・北道の農業地帯をさす。ここでは畚面積および稲の作付面積はともに全体の20%以下にすぎず, 田作が圧倒的に多い。生産額でみると, 田作が平安北道を除いて農業総生産額の60%以上を占め, なかでも雑穀が23%以上で(そのうち粟が全体の10%を超え, さらに咸鏡南道・北道では馬鈴薯が全体の10%以上を占めている), また豆類も10%を超えている。それに対して麦類は少なく, 10%未満となっている。

(2) 畚・田混濁地帯 — 水稻・麦・豆・粟地帯。朝鮮中部の黄海道, 江原道, 忠清北道の農業地帯のことで, ここでは畚面積および稲の作付面積はそれぞれ全体の20~50%, 20~30%を占めている。生産額でも稲が40~60%を占め, 田作と相伯仲している。田作のなかでは, 麦類が生産額の10%を超え, 豆類や雑穀類の比率も比較的が高い。ただし, 馬鈴薯はほとんど作付されていない。

(3) 畚作地帯 — 水稻・麦地帯。朝鮮南部の全羅南道・北道, 慶尚南道・北道, 忠清南道と中部の京畿道の農業地帯をさす。ここでは畚面積が総耕地面積の50~70%にも達している。作

(12) 印貞植, 前掲書, 39~44ページ。

付面積では二毛作畚の割合が高くなっているために稲の占める比率は低下するが、それでも30%を超えている。また生産額でも稲が全羅南道を除いていずれも総生産額の60%以上を占めている。また、田作では麦類が豆類や雑穀類、根菜類を完全に圧倒している。

以上のような特徴をもった各農業地帯の土地所有構造を1918～20年から30～32年の期間における小作地率、1戸当たりの耕地面積の変化についてみると表9のようになっている。

まず耕地面積では、全羅南道、慶尚南道、京畿道、黄海道がわずかに減少しているが、そのほかの道はいずれも増大している。そのうち畚面積は黄海道を除いて増大しているのに対して、田面積は忠清南道、咸鏡南道を除いていずれも減少している（ただし、黄海道は1920年代後半に灌漑面積が最も増えた地域である）。これは「産米増殖計画」で開墾・干拓や田から畚への地目変換が行なわれたことによるものである。その結果、黄海道を除いていずれの道も畚面積比率はこの期間に上昇している。また一般に南部から北部へうつるにつれて畚面積比率は低下しているが、南部でも畚面積では1位と3位を占める全羅南道や慶尚北道では田面積もかなり多いためにその比率は50%程度となっている。

小作地率では、いずれの道も田よりも畚のほうがはるかに高い。畚ではもともと小作地率が極めて高かった全羅北道と、平安南道・北道を除いてこの期間に上昇している。特に、畚作地帯の全羅南道、畚・田混淆地帯の忠清北道、江原道、田作地帯の咸鏡南道・北道の上昇率は著しい。また、田の小作地率はこの期間にすべての道において上昇し、しかもそれは畚の小作地率の上昇をはるかに上回っている。その結果、耕地全体でも小作地率はすべての道でかなり増大し、特に1918～20年時点で小作地率が相対的に低かった道で急激に小作地化が進展している（ただし、小作地が過半を占めているとはいえ、畚作地帯のなかでは全羅南道に次いで小作地率が低かった慶尚北道がこの期間にわずか2.1ポイントの上昇にとどまったのは注目される）。また、かなりばらつきがあるとはいえ、一般に朝鮮南部では小作地率は高く、北部では比較的低いという傾向がみられる。

1戸当たりの耕地面積についてみると、この期間に増大しているのは京畿道と咸鏡南道のわずか2道にすぎない。それも自作地の減少を上回って小作地が増えたことによるものであって、決して農家の経営条件がよくなっていることを意味しない。また平安南道は微減にとどまっているが、残りの10道はいずれも減少している。畚・田を合わせた1戸当たりの耕地面積は畚作地帯、畚・田混淆地帯、田作地帯にうつるにつれて大きくなっていくが、これは土地生産性の差異と大きく関係しているように思われる。

ところで、宮嶋博史氏は朝鮮南部の朝鮮人大地主について、小作契約の締結方法（証書契約か口頭契約か）、中間管理人の性格（地主と中間管理人との間の契約が、管理人の権限を厳しく規定した新式文記による契約なのか、それとも口約束による契約なのか）、借財理由（生産的借財が多いのか、それとも非生産的借財が多いのか）などからみた経営の性格を検討した上で、積極的な農業経営を行なう朝鮮人大地主が全羅北道を筆頭に慶尚南道、全羅南道に密度濃く

表9 地帯別小作地率, 1戸当たり耕地面積の推移

(単位;町歩)

	耕地面積				小作地率(%)				1戸当たり耕地面積			
	自作地		小作地		自作地		小作地		自作地		小作地	
	畓	計	畓	計	畓	計	畓	計	畓	計	畓	計
全羅南道A	(1)畓	202,258(46,065)	409,536	56.4	30.2	43.1	0.270	0.443	0.713	0.349	0.192	0.541
	計			49.4								
全羅北道A	(1)畓	206,854(84,625)	407,151	66.0	41.7	54.1	0.192	0.319	0.510	0.373	0.228	0.601
	計			50.8								
慶尚南道A	(1)畓	166,351(21,592)	234,305	79.7	59.7	73.9	0.168	0.136	0.305	0.661	0.202	0.863
	計			71.0								
慶尚北道A	(1)畓	168,528(56,569)	235,412	79.3	68.2	76.1	0.155	0.095	0.250	0.594	0.203	0.797
	計			71.6								
忠清南道A	(1)畓	162,355(59,602)	280,275	63.9	52.1	59.0	0.214	0.207	0.421	0.380	0.225	0.605
	計			57.9								
京畿道A	(1)畓	175,447(94,446)	278,302	66.2	56.0	62.4	0.205	0.157	0.362	0.412	0.199	0.601
	計			63.0								
忠清北道A	(1)畓	188,120(78,083)	390,353	56.9	48.9	52.7	0.251	0.320	0.571	0.331	0.306	0.636
	計			48.2								
江原道A	(1)畓	195,068(90,452)	386,071	57.4	52.1	54.8	0.232	0.255	0.488	0.312	0.278	0.590
	計			50.5								
平安南道A	(1)畓	159,990(16,460)	242,581	69.5	48.3	62.3	0.267	0.233	0.500	0.608	0.218	0.826
	計			66.0								
咸鏡南道A	(1)畓	161,079(21,356)	244,018	73.9	61.5	69.5	0.221	0.167	0.388	0.619	0.266	0.888
	計			66.0								
咸鏡北道A	(1)畓	199,682(1,348)	387,636	73.6	66.3	70.1	0.216	0.259	0.475	0.602	0.511	1.113
	計			51.5								
全羅南道B	(1)畓	203,846(3,214)	387,504	74.1	67.7	71.0	0.222	0.249	0.471	0.634	0.522	1.156
	計			52.6								
全羅北道B	(1)畓	69,673(16,428)	158,572	59.7	56.1	57.7	0.212	0.295	0.508	0.315	0.377	0.692
	計			43.9								
慶尚南道B	(1)畓	71,473(15,404)	158,694	66.6	64.0	65.2	0.172	0.226	0.398	0.343	0.402	0.745
	計			45.0								
江原道B	(1)畓	78,358(787)	331,742	48.7	32.8	36.6	0.211	0.892	1.103	0.200	0.436	0.636
	計			23.6								
黄海道A	(1)畓	88,375(1,416)	341,379	55.1	42.3	45.6	0.194	0.715	0.909	0.239	0.524	0.763
	計			25.9								
平安南道B	(1)畓	132,634(681)	543,135	69.8	56.2	59.5	0.177	0.793	0.970	0.408	1.018	1.426
	計			24.4								
咸鏡南道B	(1)畓	131,904(686)	541,787	72.7	62.8	65.2	0.155	0.654	0.809	0.411	1.106	1.517
	計			24.3								
咸鏡北道B	(1)畓	63,109(0)	392,318	65.0	44.1	47.4	0.133	1.110	1.244	0.247	0.876	1.123
	計			16.1								
全羅南道C	(1)畓	73,789(3)	396,028	64.1	53.1	55.2	0.158	0.902	1.060	0.283	1.022	1.305
	計			18.6								
咸鏡南道C	(1)畓	72,762(0)	377,397	67.3	50.7	53.7	0.132	0.885	1.016	0.270	0.909	1.179
	計			18.3								
咸鏡北道C	(1)畓	87,198(0)	409,357	63.5	54.8	56.7	0.163	0.746	0.909	0.283	0.904	1.188
	計			21.3								
朝鮮全体A	(1)畓	41,222(42)	356,797	38.4	21.6	23.5	0.154	1.503	1.657	0.096	0.413	0.509
	計			11.6								
朝鮮全体B	(1)畓	52,665(137)	391,002	46.4	31.1	33.1	0.171	1.414	1.585	0.148	0.637	0.785
	計			13.5								
朝鮮全体C	(1)畓	7,241(0)	204,954	25.0	10.6	11.1	0.081	2.627	2.708	0.027	0.313	0.340
	計			3.5								
朝鮮全体D	(1)畓	15,002(0)	211,169	32.8	18.2	19.3	0.133	2.115	2.283	0.065	0.472	0.537
	計			7.1								
朝鮮全体E	(1)畓	1,543,741(241,087)	4,329,602	64.5	42.7	50.5	0.205	0.595	0.800	0.372	0.444	0.816
	計			35.7								
朝鮮全体F	(1)畓	1,631,229(368,308)	4,387,872	66.9	49.7	56.1	0.189	0.487	0.676	0.383	0.481	0.865
	計			37.2								

資料) 朝鮮総督府編『朝鮮総督府統計年報』1918, 19, 20, 31年版, および同編『農業統計表』1930, 32年版。

注) (1) Aは1918~20年平均, Bは1930~32年平均。

(2) 土地台帳未登録耕地見積り面積を除く。

(3) 1戸当たり耕地面積の算出にさいしては純火田を除いて求めた。

存在していることからこれを「全北型地主」、また商品経済に消極的な対応しか示さない旧い型の地主が京畿道、慶尚北道に多く存在していることからこれを「京畿型地主」と類型化されている（忠清南道は両者の混在地帯¹³⁾）。この場合、先の表9からもうかがわれるように、地主的土地所有の進展度からみて、同じ「全北型地主」でも全羅北道と全羅南道との間にも差異があり、また「京畿型地主」にも京畿道と慶尚北道とは違っている。

紙幅の関係上、ここですべての道の農民層分解について検討することはできないので、各農業地帯の中からいくつかの道を選ぶこととしたい。そこで、畚作地帯では平野部の多い全羅南道、京畿道、および山間部の多い慶尚北道を、また畚・田混淆地帯では江原道を、そして田作地帯では平安南道を対象とし、それらを朝鮮全体との対比において検討してみたい（なお、朝鮮の中では最も地主的土地所有が進展しており、また地主制研究でも最も進んでいる全羅北道について、筆者は各農民階層別の自作地・小作地別耕地面積に関する統計資料をまだ入手していない）。

(1) 農家階級構成の変化

全羅南道の場合（表10）、農家戸数は1918年から32年にかけて約5万1千戸増大し、朝鮮全体に占めるウエイトも12.1%から12.7%へと上昇している。18年時点において自小作農は45.1%を占め、小作農（34.4%）よりも10.7ポイントほど多い。この点は全羅南道の特徴となっている。それに対して、小作農や自作農、地主のウエイトはいずれも朝鮮全体の平均を下回っている。ところが、20年以降になると27年を例外として終始一貫して自小作農は減少、小作農は増加するという動きを示す。また地主乙は27年までは戸数、比率ともに増加し、自作農は戸数では26年まで、比率では23年まで増加した後に減少するに至っている。このことは、自小作農を中心に農民層分解が進展していることを意味しているが、それも20年代中葉ごろまでは自小作農から小作農への分解が基本的な流れであったものの、一部には自作農、地主乙への上昇もみられたのであるが、それ以降は自小作農から小作農への転落が決定的になっている。なお、32年においては朝鮮全体の傾向と同じで、地主乙から地主甲への推転や自小作農の急減、小作農の急増といった動きがみられるが、自作農の増加は全羅南道の特徴のひとつであろう。

京畿道の場合（表11）、農家戸数は19年以降減少し（19年から32年にかけて7千戸以上の減少）、朝鮮全体に占めるウエイトも18年の9.2%から32年の8.1%へと低下した。18年時点ですでに小作農は農家戸数の過半を占めており、朝鮮全体の平均をはるかに上回っている。しかも、自作農のシェアも9.1%で全体平均の半分以下にすぎず、また自小作農のウエイトも低い。それに対して、地主、とりわけ地主甲（不耕作地主）の比率は極めて高い。京畿道においては、統計資料がほぼ整備された時点ですでに地主制が著しく発展していたといえよう。しかもその後の動きをみても、自作農が22年から25年にかけてわずかに増加傾向を示した以外は、自作農、

(13) 宮嶋博史，前掲論文。

表10 全羅南道における農家階級構成

年	戸数 (戸)										構成比 (%)							
	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	火田民		被備者	合計	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	火田民		被備者	合計
						純火田民	(兼火田民)								純火田民	(兼火田民)		
1918	764	4,495	60,890	145,315	110,645				322,109	0.24	1.40	18.90	45.11	34.35				100.00
1919	631	4,058	62,123	147,379	110,198				324,389	0.19	1.25	19.15	45.43	33.97				100.00
1920	536	4,099	59,574	150,796	117,821				332,826	0.16	1.23	17.90	45.30	35.40				100.00
1921	607	4,318	61,300	147,591	117,587				331,403	0.18	1.30	18.50	44.54	35.48				100.00
1922	510	4,564	61,546	144,016	117,730				328,366	0.16	1.39	18.74	43.86	35.85				100.00
1923	549	4,852	64,082	139,360	127,026				335,869	0.16	1.44	19.08	41.49	37.82				100.00
1924	605	4,921	64,329	134,064	133,901				337,820	0.18	1.46	19.04	39.69	39.64				100.00
1925	667	4,997	65,439	129,894	143,978				344,975	0.19	1.45	18.97	37.65	41.74				100.00
1926	865	5,474	65,522	129,212	146,628				347,701	0.25	1.57	18.84	37.16	42.17				100.00
1927	750	5,824	64,050	132,597	146,428	767	(1,023)		350,416	0.21	1.66	18.28	37.84	41.79	0.22	(0.29)		100.00
1928	810	5,788	63,940	129,735	148,928	656	(1,687)		349,857	0.23	1.65	18.28	37.08	42.57	0.19	(0.48)		100.00
1929	780	5,480	64,058	127,518	154,422	609	(1,343)		352,897	0.22	1.55	18.15	36.13	43.76	0.17	(0.38)		100.00
1930	775	5,395	65,711	130,061	160,096	417	(1,103)		362,455	0.21	1.49	18.13	35.88	44.17	0.12	(0.30)		100.00
1931	854	5,542	63,579	128,088	166,741	468	(698)		365,272	0.23	1.52	17.40	35.07	45.65	0.13	(0.19)		100.00
1932	1,344	4,170	70,450	97,982	198,632	496	(820)		373,074	0.36	1.12	18.88	26.26	53.24	0.13	(0.22)		100.00
1933			73,852	92,443	192,823			19,734	378,852		19.49		24.40	50.90			5.21	100.00
1934			73,960	92,785	192,177			22,991	381,913		19.37		24.29	50.32			6.02	100.00
1935			74,212	95,448	199,824			28,387	397,871		18.65		23.99	50.22			7.13	100.00
1936			74,554	96,775	200,007			28,019	399,355		18.67		24.23	50.08			7.02	100.00
1937			75,670	97,414	198,795			29,377	401,256		18.86		24.28	49.54			7.32	100.00
1938			76,469	96,533	202,285			28,597	403,867		18.93		23.90	50.09			7.08	100.00

資料) 全羅南道『農業統計』1938年版。

表11 京畿道における農家階級構成

年	戸 数 (戸)										構 成 比 (%)							
	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小 作 農	火 田 民		被傭者	合 計	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	火 田 民		被傭者	合 計
						純火田民	(兼火田民)								純火田民	(兼火田民)		
1918	4,226	6,195	22,137	88,852	121,722				243,233	1.74	2.55	9.10	36.53	50.04				100.00
1919	4,573	7,543	21,595	87,277	124,438				245,426	1.86	3.07	8.80	35.56	50.70				100.00
1920	3,888	8,077	20,418	84,747	126,694				243,825	1.59	3.31	8.37	34.76	51.96				100.00
1921	3,873	8,660	20,916	84,545	126,633				243,624	1.59	3.55	8.59	34.70	51.98				100.00
1922	3,907	8,417	20,265	80,590	129,091				244,240	1.60	3.45	8.30	33.00	52.85				100.00
1923	3,749	8,726	19,989	77,334	129,719				239,517	1.57	3.64	8.35	32.29	54.16				100.00
1924	3,630	8,645	20,493	75,424	130,255				238,447	1.52	3.63	8.59	31.63	54.63				100.00
1925	3,427	8,176	20,621	73,697	134,100				239,612	1.43	3.41	8.61	30.76	55.97				100.00
1926	3,618	9,917	19,207	72,382	133,924				238,351	1.52	4.16	8.06	30.37	56.19				100.00
1927	3,596	7,770	19,454	68,728	136,952	442	(1,770)		236,942	1.52	3.28	8.21	29.01	57.80	0.19	(0.75)		100.00
1928	3,590	7,804	19,183	66,964	139,064	512	(1,793)		237,117	1.51	3.29	8.09	28.24	58.65	0.22	(0.76)		100.00
1929	3,695	7,590	18,652	66,743	140,863	378	(1,622)		237,921	1.55	3.19	7.84	28.05	59.21	0.16	(0.68)		100.00
1930	3,661	7,267	18,043	64,373	145,783	388	(1,661)		239,515	1.53	3.03	7.53	26.88	60.87	0.16	(0.69)		100.00
1931	3,632	6,979	17,021	61,565	148,158	342	(1,246)		237,697	1.53	2.94	7.16	25.90	62.33	0.14	(0.52)		100.00
1932	5,517	5,014	14,699	51,345	161,156	138	(330)		237,869	2.32	2.11	6.18	21.59	67.75	0.06	(0.14)		100.00
1933		18,789		49,219	164,392	528		4,734	237,662		7.91	20.71	69.17		0.22		1.99	100.00
1934		18,746		50,970	164,790	498		4,601	239,605		7.82	21.27	68.78		0.21		1.92	100.00
1935		18,990		52,273	167,314	447		4,977	244,001		7.78	21.42	68.57		0.18		2.04	100.00

資料) 京畿道『農事統計』1938年版, 前掲『農業統計表』各年版。

自小作農の減少、小作農の増加が続き、農民層分解における典型的な全般的没落傾向を示している。

慶尚北道については、18年以降の統計をすべて入手することはできなかったが（表12）、農家戸数は31年まで増加し、朝鮮全農家戸数の12%台を維持している（ただし、32年には朝鮮全体の傾向とは異なり、前年よりも約1万4千戸の脱農があったことは注目される）。農家階級構成についてみると、23年時点でも自小作農が45.0%を占めており、朝鮮全体の平均よりも10ポイントほど高くなっている。それに対して、小作農や自作農、地主のウエイトはともに低い。その後の動きをみると、自小作農がほぼ一貫して減少している点は朝鮮全体の傾向と同じであるが、慶尚北道の特徴は27年ごろまでは両極分解の傾向を示し、しかもそれが小作農への転落よりも自作農への上昇が基本線となっている点である。すなわち、23年から27年にかけて自小作農は6ポイントの減少、小作農は2.5ポイントの増加となっているのに対して、自作農は3.1ポイントの増加となっているのである。また、自小作農と小作農のウエイトの逆転が生じるのは、朝鮮全体では20年であるのに対して、慶尚北道では28年と遅く、しかも、朝鮮全体よりも1年早く31年には自小作農の急減、小作農の急増、地主乙から地主甲への推転がみられることも慶尚北道の特徴であろう。

江原道の場合（表13）、農家戸数は18年から32年にかけて3万6千戸以上増加し、朝鮮全農家戸数に占めるシェアも7.1%から7.7%に上昇している。農家階級構成については、18年時点で自作農、自小作農、小作農はともに32%前後を占めており、朝鮮全体と対比して自作農のウエイトが高い。このうち自小作農は19年に農家戸数の39.8%を占め、前年よりも一挙に6.9ポイントも増加したのに対して、小作農は逆に5.7ポイントもウエイトを低下させている。その後、自小作農のウエイトは低下し、また自作農も24年をピークに低下しはじめるが、20年代末までは明確な農民層分解の傾向を示しておらず、また自小作農と小作農の比重の順位の逆転も自小作農の急減、小作農の急増が生じた32年と遅くなっている。ただし、28年以降自作農が急激に減少していることは注目に値しよう。

平安南道の場合（表14）、31年まで農家戸数にそれほどの変動はみられない。また農家階級構成についても、18年時点で朝鮮全体と対比して自小作農や自作農の比重が高く、小作農のウエイトは低いが、その後の農民層分解についても自小作農、自作農の漸減、小作農の漸増といった傾向はあるものの、江原道と同様に緩慢な動きを示している。この点については、表8からもわかるように、商業的農業の中心をなした米の生産は少なく、主に雑穀類や豆類を生産していたことと関係があるように思われる。ただし、32年における自小作農の急減、小作農の急増は朝鮮全体の変動を上回る激しさとなっている。なお、平安南道では地主のウエイトが高いことも特徴であろう。

（2）小作地率の推移

18年時点における各道の耕地の小作地率は、朝鮮全体と対比して、全羅南道、江原道では畚、

表12 慶尚北道における農家階級構成

年	戸数 (戸)										構成比 (%)							
	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	火田民		被傭者	合計	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	火田民		被傭者	合計
						純火田民	(兼火田民)								純火田民	(兼火田民)		
1923	1,095	7,884	55,185	147,828	116,508				328,500	0.33	2.40	16.80	45.00	35.47				100.00
1927	1,378	8,859	67,281	131,472	128,010	381	(1,649)		337,381	0.41	2.63	19.94	38.97	37.94	0.11	(0.49)		100.00
1928	1,687	9,266	67,620	132,971	139,594	621	(1,903)		351,759	0.48	2.63	19.22	37.80	39.68	0.18	(0.54)		100.00
1929	2,101	9,293	67,572	130,687	141,631	849	(1,946)		352,133	0.60	2.64	19.19	37.11	40.22	0.24	(0.55)		100.00
1930	2,568	9,273	67,387	128,862	145,871	1,212	(2,280)		355,173	0.72	2.61	18.97	36.28	41.07	0.34	(0.64)		100.00
1931	3,964	8,725	66,311	109,523	179,272	2,325	(1,901)		370,120	1.07	2.36	17.92	29.59	48.44	0.63	(0.51)		100.00
1932	4,890	8,585	61,454	106,327	171,805	3,179	(2,267)		356,240	1.37	2.41	17.25	29.85	48.23	0.89	(0.64)		100.00
1933			72,557	104,326	168,211	2,540		11,659	359,293		20.19	29.04	46.82	0.71			3.24	100.00
1934			73,738	104,753	165,159	1,305		11,111	356,066		20.71	29.42	46.38	0.37			3.12	100.00
1935			76,396	107,779	167,109	2,480		12,407	365,171		20.92	29.51	45.76	0.68			3.40	100.00

資料) 前掲『農業統計表』各年版。

表13 江原道における農家階級構成

年	戸数 (戸)								構成比 (%)																			
	地主甲		地主乙		自作農		自小作農		小作農		被傭者		合計		地主甲		地主乙		自作農		自小作農		小作農		被傭者		合計	
	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民	純火田民	兼火田民
1918	715	4,065	61,318	61,740	60,008									187,846	0.38	2.16	32.64	32.87	31.95									100.00
1919	511	6,568	57,452	75,781	50,072									190,384	0.27	3.45	30.18	39.80	26.30									100.00
1920	484	6,196	59,037	76,466	52,088									194,271	0.25	3.19	30.39	39.36	26.81									100.00
1921	541	6,563	57,999	75,943	54,964									196,010	0.28	3.35	29.59	38.74	28.04									100.00
1922	594	6,036	59,219	76,048	55,736									197,633	0.30	3.05	29.96	38.48	28.20									100.00
1923	672	5,939	59,332	76,373	54,027									196,343	0.34	3.02	30.22	38.90	27.52									100.00
1924	727	6,314	59,528	75,390	53,717									195,676	0.37	3.23	30.42	38.53	27.45									100.00
1925 ⁽¹⁾	751	6,945	59,114	75,672	58,773									200,255	0.38	3.47	29.52	37.79	29.35									100.00
1926 ⁽¹⁾	712	6,061	58,135	72,317	54,458									199,995	0.36	3.03	29.07	36.16	27.23									100.00
1927	696	5,873	56,714	74,394	56,492			5,220	(16,330)					199,389	0.35	2.95	28.44	37.31	28.33									100.00
1928	760	6,108	52,821	72,148	61,164			8,159	(21,362)					201,160	0.38	3.04	26.26	35.87	30.41									100.00
1929	700	5,945	51,633	72,405	63,389			8,109	(18,844)					202,181	0.35	2.94	25.54	35.81	31.35									100.00
1930	721	5,918	51,471	77,014	66,785			9,759	(22,846)					211,668	0.34	2.80	24.32	36.38	31.55									100.00
1931	789	6,010	49,179	75,849	70,106			9,536	(22,835)					211,469	0.37	2.84	23.26	35.87	33.15									100.00
1932	1,023	5,368	46,480	66,595	89,218			15,605	(21,202)					224,289	0.46	2.39	20.72	29.69	39.78									100.00
1933			50,539	67,085	95,127									218,963		23.08	30.64	43.44										100.00
1934			50,007	65,966	97,370									220,332		22.70	29.94	44.19										100.00
1935			51,208	68,180	98,913									225,807		22.68	30.19	43.80										100.00
1936			50,278	67,765	98,237									224,137		22.43	30.23	43.83										100.00

資料) 江原道『農業統計』1936年版。

注 (1) 各項目の合計と合計欄の数字が一致していない。

表14 平安南道における農家階級構成

年	戸数 (戸)						構成比 (%)							
	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	合計	地主甲	地主乙	自作農	自小作農	小作農	合計	火田民	被備者
													純火田民 (兼火田民)	火田民 (兼火田民)
1918	1,838	7,137	41,019	68,699	48,005	166,698	1.10	4.28	24.61	41.21	28.80			100.00
1919	1,890	7,409	40,076	68,310	47,648	165,331	1.14	4.48	24.24	41.32	28.82			100.00
1920	1,932	7,715	38,858	68,232	48,541	165,278	1.17	4.67	23.51	41.28	29.37			100.00
1921	2,170	8,125	38,803	66,937	48,487	164,522	1.32	4.94	23.59	40.69	29.47			100.00
1922	2,305	8,697	37,419	65,089	50,824	164,334	1.40	5.29	22.77	39.61	30.93			100.00
1923	2,079	8,596	36,526	65,220	52,320	164,741	1.26	5.22	22.17	39.59	31.76			100.00
1924	2,309	8,833	35,553	65,251	52,875	164,821	1.40	5.36	21.57	39.59	32.08			100.00
1925	2,608	9,669	35,573	65,434	55,672	168,955	1.54	5.72	21.05	38.73	32.95			100.00
1926	2,534	9,189	34,460	63,641	53,353	168,505	1.50	5.45	20.45	37.77	31.66	3.16		100.00
1927	2,491	9,332	34,330	64,225	55,723	168,975	1.47	5.52	20.32	38.01	32.98	1.70	(3.02)	100.00
1928	2,370	9,207	33,888	61,951	56,593	168,312	1.41	5.47	20.13	36.81	33.62	2.56	(5.11)	100.00
1929	2,274	9,221	33,586	62,167	57,595	168,643	1.35	5.47	19.92	36.86	34.15	2.25	(4.94)	100.00
1930	2,117	9,300	34,157	60,267	59,748	169,266	1.25	5.49	20.18	35.60	35.30	2.17	(5.14)	100.00
1931	1,974	9,275	33,777	59,016	60,524	168,191	1.17	5.51	20.08	35.09	35.99	2.16	(5.46)	100.00
1932	5,020	8,680	33,323	44,359	80,814	177,109	2.83	4.90	18.81	25.05	45.63	2.77	(7.05)	100.00
1933		44,112		42,259	87,001	180,929		24.38		23.36	48.09	3.64		100.00
1934		43,009		41,679	87,526	179,925		23.90		23.16	48.65	3.86		100.00
1935		41,916		42,253	84,911	176,199		23.79		23.98	48.19	3.67		100.00

資料) 平安南道『農業統計書』1932年版, 前掲『農業統計表』各年版。

田ともに低く、京畿道では畚、田ともに高い。また、慶尚北道では畚の小作地率は低いが、田および全耕地面積では高い。さらに、平安南道では田の小作地率は高いが、畚および全耕地面積では若干低くなっている。だが程度の差はあれ、いずれの道においても畚の小作地率が田の小作地率を上回っていることには変わりがない。各道についてやや詳しくみると、全羅南道の場合、畚の小作地率は19年以降増加しているが、特に28年以降の増加は顕著で、32年には朝鮮全体の平均とほぼ等しくなるに至っている。これに対して、田では20年の急増、23年の急減、27年の急増というふうに激しく揺れ動いた後にはほぼ横ばい状態となっていて、全体の平均よりもかなり低い（表15）。京畿道では、畚の小作地の場合、面積では23年まで、また比率では24年まで減少傾向を示し、その後も面積、比率ともに20年代末まで横ばい状態となっている。また田の場合は、面積、比率ともに減少傾向にある。その後は増大に転じているものの、わずかな増加にとどまっており、18年時点の水準とほぼ同じとなっている。これは、もともと京畿道では地主的土地所有が著しく進展していたことにもよると思われる（表16）。慶尚北道においては、20年代以降畚、田ともに小作地率は若干高くなってはいるが、全体的にみてほぼ横ばい状態となっている（表17）。江原道では、畚、田ともに26年までは小作地率は低下ないし、横ばい状態となっている。また27年には、とりわけ田で小作地化が急激に進行するが、その後は停滞状態となっている（表18）。また平安南道においては、畚が27年を底にして以後は増加に転じているのに対し、田の場合は24年を例外として19年以降増加している（表19）。この点は、朝鮮全体の傾向とはかなり異なっている。

(3) 各農家階層別の経営面積の推移

各農家階層別の自作地・小作地別耕作面積については、管見の範囲ではあるが、戦前において東畑精一・大川一司両氏が産米の各農家階層間への分配量を検討する際に32年の統計を利用し、⁽¹⁴⁾また戦後の研究においても両氏の用いた統計数字を引用するにとどまっていたように思われる。

表20によれば、34年時点での朝鮮全体における農家階層別の耕作面積のシェアは、自小作農が最も高く41.2%を占め、次いで小作農が36.3%となっており、自作農（地主乙を含む）は22.6%と最もウエイトが低い。このうち、自小作農については畚、田ともにほぼ同じウエイトを占めているが、自作地では田のほうが、また小作地では畚のほうがウエイトが高くなっている。また自作農（地主乙を含む）では田のウエイトが高く、逆に小作農では畚のウエイトが高い。とりわけ畚だけでは小作農は自小作農を上回り45%を占めている。

道別にみると、自作農（地主乙を含む）については全羅南道、慶尚北道、平安南道では畚、

(14) 東畑精一・大川一司『朝鮮米穀経済論』日本学術振興会、1937年、86～87ページ。両氏は、資料として朝鮮総督府農林局編『朝鮮米穀要覧』を利用しているが、これには各年毎に農民階層別の自作地・小作地別面積が全道にわたって掲載されている。しかし、アジア経済研究所図書資料部編『旧植民地関係機関刊行物総合目録朝鮮編』アジア経済研究所、1974年、によれば（84ページ）、日本には同資料は1934～40年版しかなく、そのため30年代前半以降の統計数字しかわからないという難点がある。

表15 全羅南道における自作地・小作地別耕地面積

(単位;町歩)

年	畓			田			計			小作地率(%)		
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	畓	田	計
1918	77,506	113,683	191,189	155,556	56,875	212,431	233,062	170,558	403,620	59.5	26.8	42.3
1919	88,010	114,303	202,313	156,883	50,294	207,177	244,893	164,597	409,490	56.5	24.3	40.2
1920	87,773	114,605	202,378	126,690	80,542	207,231	214,463	195,147	409,609	56.6	38.9	47.6
1921	85,674	116,727	202,401	128,525	78,628	207,153	214,199	195,355	409,553	57.7	38.0	47.7
1922	84,280	118,034	202,315	126,784	80,684	207,467	211,064	198,718	409,782	58.3	38.9	48.5
1923	83,354	119,286	202,640	142,176	65,899	208,075	225,530	185,185	410,715	58.9	31.7	45.1
1924	82,561	120,034	202,595	142,760	65,364	208,124	225,321	185,397	410,718	59.2	31.4	45.1
1925	80,991	122,000	202,991	139,231	69,591	208,822	220,222	191,591	411,813	60.1	33.3	46.5
1926	79,015	123,712	202,727	138,530	70,083	208,612	217,545	193,795	411,339	61.0	33.6	47.1
1927	78,070	125,071	203,141	120,326	78,861	199,187	198,396	203,932	402,327	61.6	39.6	50.7
1928	74,195	130,100	204,295	118,144	81,073	199,216	192,339	211,172	403,511	63.7	40.7	52.3
1929	73,798	131,307	205,105	117,478	82,143	199,621	191,276	213,450	404,726	64.0	41.1	52.7
1930	72,924	132,906	205,830	116,183	83,441	199,624	189,107	216,347	405,454	64.6	41.8	53.4
1931	69,601	137,485	207,086	115,816	84,661	200,477	185,417	222,146	407,563	66.4	42.2	54.5
1932	68,178	139,468	207,646	118,465	82,324	200,789	186,643	221,792	408,435	67.2	41.0	54.3
1933	67,806	140,395	208,201	123,208	85,907	209,115	191,013	226,302	417,315	67.4	41.1	54.2
1934	67,158	142,234	209,392	124,283	86,518	210,801	191,441	228,752	420,192	67.9	41.0	54.4
1935	68,439	141,862	210,301	124,548	85,594	210,142	192,987	227,456	420,443	67.5	40.7	54.1

資料) 表10と同じ。

表16 京畿道における自作地・小作地別耕地面積

(単位;町歩)

年	畓			田			計			小作地率(%)		
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	畓	田	計
1918	51,151	148,184	199,336	59,317	128,381	187,701	110,468	276,565	387,033	74.3	68.4	71.5
1919	53,238	146,383	199,621	65,481	122,729	188,210	118,719	269,112	387,831	73.3	65.2	69.4
1920	53,384	146,584	199,968	65,278	122,714	187,992	118,662	269,298	387,960	73.3	65.3	69.4
1921	53,779	145,912	199,691	65,486	122,158	187,644	119,264	268,070	387,334	73.1	65.1	69.2
1922	52,272	143,937	196,209	64,186	119,909	184,095	116,458	263,845	380,304	73.4	65.1	69.4
1923	53,994	143,909	197,904	65,153	120,618	185,772	119,147	264,528	383,675	72.7	64.9	68.9
1924	54,741	144,214	198,955	65,390	120,859	186,249	120,131	265,073	385,204	72.5	64.9	68.8
1925	53,735	145,194	198,928	65,956	119,108	185,064	119,691	264,302	383,993	73.0	64.4	68.8
1926	54,708	146,005	200,713	68,098	118,219	186,316	122,806	264,223	387,029	72.7	63.5	68.3
1927	55,330	146,822	202,152	64,005	121,485	185,490	119,335	268,307	387,642	72.6	65.5	69.2
1928	55,165	146,239	201,404	62,812	121,964	184,777	117,977	268,203	386,180	72.6	66.0	69.5
1929	55,022	147,973	202,995	62,719	123,002	185,721	117,741	270,975	388,715	72.9	66.2	69.7
1930	52,431	149,907	202,338	61,028	123,267	184,295	113,459	273,174	386,632	74.1	66.9	70.7
1931	53,094	150,391	203,485	59,235	124,076	183,311	112,329	274,468	386,796	73.9	67.7	71.0
1932	53,139	152,578	205,717	57,753	125,615	183,368	110,892	278,193	389,085	74.2	68.5	71.5
1933	53,342	154,032	207,374	57,690	126,186	183,876	111,032	280,217	391,250	74.3	68.6	71.6
1934	52,629	155,106	207,735	57,104	126,693	183,797	109,733	281,799	391,532	74.7	68.9	72.0
1935	53,123	156,004	209,128	57,111	125,965	183,076	110,234	281,969	392,203	74.6	68.8	71.9

資料) 表11と同じ(1938年版)。

表17 慶尚北道における自作地・小作地別面積

(単位;町歩)

年	畓			田			計			小作地率(%)		
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	畓	田	計
1918	80,024	107,838	187,862	102,982	99,135	202,117	183,007	206,973	389,979	57.4	49.0	53.1
1919	81,721	107,003	188,724	103,431	99,093	202,524	185,152	206,096	391,248	56.7	48.9	52.7
1920	81,757	106,017	187,775	103,822	98,236	202,058	185,580	204,253	389,833	56.5	48.6	52.4
1921	82,521	106,048	188,568	102,666	98,533	201,198	185,186	204,580	389,767	56.2	49.0	52.5
1922	84,164	104,017	188,182	103,742	96,826	200,568	187,906	200,843	388,749	55.3	48.3	51.7
1923	82,383	106,476	188,859	100,013	101,682	201,695	182,396	208,157	390,553	56.4	50.4	53.2
1924	82,425	105,906	188,331	100,394	100,463	200,857	182,819	206,370	389,188	56.2	50.0	53.0
1925	83,301	105,276	188,577	103,007	98,230	201,237	186,308	203,506	389,814	55.8	48.8	52.2
1926	83,096	106,169	189,265	101,757	98,638	200,395	184,853	204,807	389,660	56.1	49.2	52.6
1927	86,060	104,207	190,267	98,720	100,797	199,517	184,780	205,005	389,785	54.8	50.5	52.6
1928	85,068	106,712	191,780	98,747	98,627	197,374	183,815	205,339	389,153	55.6	50.0	52.8
1929	85,185	108,279	193,464	96,980	98,729	195,709	182,164	207,009	389,173	56.0	50.4	53.2
1930	85,024	110,180	195,204	94,173	100,300	194,474	179,198	210,480	389,678	56.4	51.6	54.0
1931	81,584	112,787	194,371	89,714	100,413	190,126	171,297	213,200	384,497	58.0	52.8	55.4
1932	82,865	112,765	195,630	90,681	97,727	188,408	173,545	210,492	384,037	57.6	51.9	54.8
1933	81,542	114,215	195,757	89,189	97,794	186,983	170,731	212,009	382,740	58.3	52.3	55.4
1934	81,099	113,927	195,026	87,831	96,974	184,805	168,930	210,902	379,832	58.4	52.5	55.5
1935	82,337	113,899	196,236	86,771	97,390	184,161	169,108	211,289	380,397	58.0	52.9	55.5

資料) 前掲『農業統計表』,『朝鮮總督府統計年報』各年版。

表18 江原道における自作地・小作地別耕地面積

(単位：町歩)

年	畓		田		計		小作地率(%)	
	自作地	小作地	自作地	小作地	自作地	小作地	畓	田
1918	37,888	41,142	168,581	85,254	253,835	206,469	52.1	33.6
1919	40,642	37,339	170,338	83,864	254,202	210,980	47.9	33.0
1920	42,068	35,996	171,705	80,408	252,113	213,773	46.1	31.9
1921	41,472	36,493	173,855	79,914	253,770	215,327	46.8	31.5
1922	41,496	36,945	177,312	77,153	254,466	218,808	47.1	30.3
1923	41,961	36,870	178,544	75,379	253,923	220,505	46.8	29.7
1924	41,765	38,378	177,728	73,100	250,828	219,494	47.9	29.1
1925	41,496	39,867	177,866	80,051	257,918	219,362	49.0	31.0
1926	43,347	40,537	172,644	78,896	251,541	215,991	48.3	31.4
1927	40,135	45,057	149,441	105,439	254,880	189,576	52.9	41.4
1928	39,545	47,140	152,603	105,925	258,527	192,148	54.4	41.0
1929	39,059	48,579	148,318	107,865	256,183	187,377	55.4	42.1
1930	39,407	47,564	144,956	108,904	253,860	184,363	54.7	42.9
1931	39,142	49,584	146,693	105,586	252,279	185,835	55.9	41.9
1932	40,437	48,992	146,361	106,510	252,871	186,798	54.8	42.1
1933	40,439	49,867	147,377	105,323	252,699	187,815	55.2	41.7
1934	40,070	50,885	145,697	107,361	253,057	185,767	55.9	42.4
1935	40,098	51,583	142,353	110,006	252,359	182,451	56.3	43.6

資料) 表17と同じ。

表19 平安南道における自作地・小作地別耕地面積

(単位:町歩)

年	畓		田		計			小作地率(%)				
	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	自作地	小作地	計	畓	田	計
1918	22,739	40,178	62,916	182,348	148,768	331,116	205,086	188,946	394,032	63.9	44.9	48.0
1919	21,615	41,427	63,042	185,581	142,445	328,027	207,196	183,872	391,068	65.7	43.4	47.0
1920	21,949	41,421	63,370	184,284	144,200	328,484	206,233	185,621	391,854	65.4	43.9	47.4
1921	22,737	41,065	63,803	179,996	148,098	328,093	202,733	189,163	391,896	64.4	45.1	48.3
1922	23,317	41,096	64,413	181,068	149,104	330,172	204,385	190,200	394,585	63.8	45.2	48.2
1923	23,007	41,455	64,463	178,835	150,549	329,383	201,842	192,004	393,846	64.3	45.7	48.8
1924	23,844	40,803	64,647	182,920	145,300	328,220	206,764	186,102	392,866	63.1	44.3	47.4
1925	24,143	41,075	65,218	178,447	152,421	330,868	202,590	193,496	396,086	63.0	46.1	48.9
1926	24,241	42,066	66,307	177,504	152,049	329,553	201,745	194,115	395,860	63.4	46.1	49.0
1927	25,485	41,754	67,239	174,315	154,415	328,730	199,800	196,169	395,969	62.1	47.0	49.5
1928	25,839	42,485	68,324	165,860	161,759	327,618	191,698	204,244	395,942	62.2	49.4	51.6
1929	26,060	43,532	69,592	153,620	171,296	324,916	179,680	214,828	394,508	62.6	52.7	54.5
1930	25,635	46,015	71,649	152,626	171,976	324,602	178,260	217,991	396,251	64.2	53.0	55.0
1931	26,608	46,758	73,366	151,508	170,939	322,446	178,116	217,696	395,812	63.7	53.0	55.0
1932	27,201	49,151	76,352	149,091	170,577	319,668	176,292	219,728	396,019	64.4	53.4	55.5
1933	27,975	49,256	77,231	148,400	170,062	318,462	176,375	219,318	395,693	63.8	53.4	55.4
1934	28,792	50,348	79,141	144,462	172,738	317,200	173,254	223,086	396,340	63.6	54.5	56.3
1935	29,569	51,058	80,627	144,887	170,841	315,728	174,456	221,898	396,355	63.3	54.1	56.0

資料) 表17と同じ

植民地朝鮮における農民層分解

表20 各道における農家階層別の自作地・小作地別耕地面積

Table with columns for year, farm type (owner, tenant, small tenant), area, and total area. The table is organized into rows for different provinces (e.g., all Korea, Gyeonggi, Gyeongsang) and years from 1927 to 1936. Each row contains multiple columns for different categories of land and farming methods.

(単位：町歩)

資料) 朝鮮總督府農務部「朝鮮米穀要覧」1936、37年版、および全羅南道「農業統計」1936年版、慶尚北道「農業統計」1938年版、慶尚北道「農業統計」1937年版、江原道「農業統計」1936年版。

(注) カッコ内の数字は、それぞれ市、町、および總耕地面積に占める構成比(%)。

田を合わせると朝鮮全体の平均とほぼ同じウエイトを占めているが、全羅南道では畚のウエイトが低く、田のウエイトが高いのに対して、慶尚北道、平安南道ではその逆になっている。また京畿道では畚、田ともに平均を大きく下回っており、しかもそのウエイトを次第に低下させているのに対して、江原道では畚、田ともに平均よりも高い比率を占めている。

自小作農については、京畿道が田の小作地で朝鮮全体の平均を上回っている以外は畚、田および自作地、小作地ともに平均を下回っており、しかもそのシェアを低下させているのに対して、それ以外の道の場合はいずれも平均よりも高い割合を占めている。このうち、全羅南道、慶尚北道では畚のほうが田のウエイトよりも高いが、畚では自作地よりも小作地のほうが多いのに対して、田については全羅南道で自作地のウエイトが高く、また慶尚北道では自作地の割合が次第に低下した結果、自作地と小作地はほぼ同じ割合となっている。また江原道については、畚では自作地の割合が若干低下していった結果、小作地とほぼ同じ割合となっているが、田では自作地のほうが多い。これに対して、平安南道では畚、田ともに小作地のほうが多い。

小作農についてみると、京畿道では畚、田ともに自小作農の耕作面積よりも多く、京畿道における農業生産は主として小作農によって担われていたことがわかる。それ以外の道では畚、田ともに朝鮮全体のレベルを大きく下回っている。特にそれは江原道についてあてはまる。また畚については慶尚北道が、田については全羅南道が朝鮮全体の平均よりもかなり下回っている。だが同時に、全羅南道、慶尚北道では小作農の畚の耕作面積が次第に増加していることも注目される（その他の道については付表1を参照）。

(4) 農家階層別の1戸当たりの経営面積

最後に農家階層別の1戸当たりの耕作面積についてみると（表21）、朝鮮全体では33年時点で平均が1.59町歩であるが、自作農（地主乙を含む）が1.90町歩、自小作農が2.56町歩（うち自作地1.25町歩、小作地1.31町歩）、小作農1.04町歩となっている。自作農（地主乙を含む）や自小作農では平均よりもそれぞれ19.5%、61.0%も耕作面積が多いのに対して、小作農では34.6%も少ない。

地域によって土地生産性がかなり異なっているので、階層別の耕作面積についての道別対比はそれほど意味をもたない。そこで時系列な検討をみると（ただし、農民層分解に伴う農家戸数の変動によって、1戸当たりの耕作面積は大きく変わってこよう）、自作農（地主乙を含む）の耕作面積は京畿道と江原道では増加しているのに対して、全羅南道、慶尚北道では減少ないし横ばい状態となっている。自小作農については29年から31年にかけてほとんどの道で自作地面積を減少させてはいるものの、傾向的には経営面積を拡大させている。これに対して、小作農はほぼ例外なく経営面積を縮小させており、経営状態を一層悪化させている（その他の道については付表2を参照）。

こうした結果、まず第1に、自作農（地主乙を含む）の経営面積と自小作農の自作地面積との格差は道ごとにはばらつきがみられるようになった。すなわち、その格差は27年から34年にか

表21 各道における農家階層別の1戸当たり耕作面積

(単位:町歩)

道名	年	自作農(地主乙を含む)										自作農										小作農										平均									
		自作農					自作農					自作農					自作農					自作農					自作農					自作農					自作農				
		番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計	番	田	計							
全羅南道	1927	0.481	0.870	1.352	0.335	0.449	0.784	0.386	0.270	0.657	0.721	0.720	1.441	0.505	0.293	0.798	0.582	0.571	1.153																						
	1928	0.443	0.845	1.288	0.334	0.456	0.790	0.411	0.284	0.696	0.745	0.741	1.486	0.515	0.297	0.812	0.586	0.572	1.158																						
	1929	0.423	0.832	1.255	0.348	0.467	0.816	0.420	0.295	0.714	0.768	0.762	1.530	0.503	0.289	0.792	0.584	0.568	1.151																						
	1930	0.398	0.809	1.208	0.342	0.451	0.794	0.409	0.292	0.701	0.752	0.743	1.495	0.498	0.284	0.781	0.570	0.553	1.122																						
	1931	0.392	0.839	1.232	0.332	0.451	0.783	0.429	0.298	0.727	0.761	0.749	1.510	0.495	0.279	0.774	0.569	0.551	1.120																						
	1932	0.360	0.832	1.192	0.422	0.576	0.997	0.570	0.387	0.957	0.991	0.963	1.954	0.421	0.223	0.644	0.559	0.541	1.100																						
	1933	0.367	0.888	1.255	0.440	0.624	1.064	0.608	0.424	1.032	1.048	1.048	2.096	0.437	0.242	0.679	0.580	0.582	1.162																						
	1934	0.363	0.893	1.255	0.435	0.628	1.063	0.610	0.420	1.030	1.045	1.048	2.093	0.445	0.248	0.693	0.583	0.587	1.171																						
	1935	0.371	0.893	1.264	0.428	0.611	1.039	0.595	0.404	1.000	1.024	1.015	2.039	0.426	0.235	0.661	0.569	0.569	1.138																						
	1927	0.510	0.649	1.159	0.359	0.398	0.757	0.366	0.344	0.710	0.725	0.742	1.467	0.438	0.434	0.872	0.567	0.595	1.152																						
1928	0.493	0.595	1.089	0.354	0.398	0.753	0.385	0.353	0.738	0.739	0.751	1.490	0.398	0.370	0.768	0.549	0.565	1.114																							
1929	0.511	0.590	1.101	0.351	0.395	0.747	0.384	0.353	0.737	0.735	0.748	1.483	0.410	0.371	0.782	0.554	0.560	1.115																							
1930	0.503	0.581	1.084	0.361	0.385	0.746	0.392	0.362	0.754	0.752	0.748	1.500	0.409	0.367	0.777	0.556	0.553	1.109																							
1931	0.489	0.566	1.055	0.410	0.431	0.841	0.460	0.418	0.878	0.870	0.849	1.719	0.348	0.305	0.653	0.534	0.523	1.057																							
1932	0.557	0.637	1.193	0.413	0.433	0.846	0.471	0.415	0.886	0.884	0.848	1.732	0.365	0.312	0.677	0.562	0.541	1.103																							
1933	0.524	0.602	1.126	0.417	0.436	0.854	0.483	0.417	0.900	0.900	0.853	1.753	0.379	0.323	0.702	0.567	0.548	1.109																							
1934	0.499	0.579	1.079	0.423	0.427	0.849	0.476	0.410	0.886	0.898	0.837	1.735	0.388	0.329	0.718	0.568	0.538	1.105																							
1935	0.498	0.560	1.058	0.411	0.408	0.819	0.462	0.396	0.857	0.873	0.804	1.677	0.384	0.328	0.711	0.560	0.526	1.086																							
1927	0.796	0.994	1.790	0.496	0.513	1.009	0.674	0.632	1.306	1.170	1.145	2.351	0.728	0.584	1.313	0.865	0.796	1.661																							
1928	1.159	1.284	2.443	0.606	0.648	1.254	0.847	0.769	1.616	1.454	1.417	2.870	0.679	0.531	1.210	0.886	0.784	1.670																							
1929	0.311	1.226	1.536	0.278	0.978	1.256	0.222	0.643	0.866	0.501	1.621	2.121	0.505	1.019	1.524	0.439	1.313	1.751																							
1930	0.321	1.340	1.661	0.286	1.021	1.307	0.256	0.722	0.978	0.542	1.743	2.285	0.469	0.880	1.349	0.449	1.340	1.789																							
1931	0.315	1.397	1.712	0.289	0.938	1.226	0.272	0.727	0.999	0.561	1.665	2.225	0.455	0.871	1.327	0.452	1.320	1.772																							
1932	0.327	1.346	1.673	0.268	0.879	1.147	0.248	0.673	0.922	0.516	1.553	2.069	0.426	0.854	1.280	0.431	1.257	1.688																							
1933	0.345	1.388	1.733	0.265	0.924	1.189	0.261	0.647	0.908	0.526	1.571	2.097	0.425	0.806	1.231	0.439	1.249	1.689																							
1934	0.385	1.470	1.855	0.307	1.053	1.360	0.304	0.750	1.054	0.611	1.803	2.414	0.322	0.634	0.956	0.429	1.212	1.640																							
1935	0.390	1.479	1.869	0.309	1.083	1.392	0.308	0.758	1.066	0.617	1.841	2.458	0.307	0.573	0.879	0.424	1.188	1.612																							
平南	0.397	1.510	1.907	0.307	1.064	1.371	0.307	0.764	1.071	0.613	1.828	2.442	0.315	0.585	0.900	0.426	1.186	1.612																							
安道	0.19	1.69	1.88	0.36	1.73	2.09	0.44	1.91	2.35	0.80	3.64	4.44	0.37	1.07	1.44	0.47	1.84	2.31																							
全道	0.323	1.683	2.005	0.358	1.730	2.088	0.438	1.904	2.342	0.796	3.633	4.430	0.366	1.067	1.434	0.460	1.842	2.301																							
朝鮮	0.46	1.44	1.90	0.41	0.84	1.25	0.54	0.77	1.31	0.95	1.61	2.56	0.49	0.55	1.04	0.60	0.99	1.59																							
全体	0.448	1.396	1.845	0.403	0.826	1.228	0.536	0.762	1.313	0.939	1.588	2.527	0.480	0.547	1.027	0.591	0.976	1.567																							

資料) 表20と同じ。

注) 1) 未登録耕地を含む。

けて京畿道では0.781町歩から1.189町歩へ、また江原道では0.280町歩から0.477町歩へと拡大しているのに対して、全羅南道では0.568町歩から0.192町歩へ、また慶尚北道では0.402町歩から0.230町歩へと縮小しているのである。

第2に、自小作農の小作地面積と小作農の経営面積との格差が逆転することになった。すなわち、27年時点ではいずれの道においても小作農の経営面積のほうが大きかったが、34年になると自小作農の小作地面積のほうが小作農の経営面積を上回るに至っているのである。こうした事態は小作農の経営状態の一層の不利化を意味している。そして、これによって小作農を中心とする朝鮮農家の日本への渡航や「満州」への移動が促進されていったのである。⁽¹⁵⁾

おわりに

以上、1920年代から30年代前半にかけての朝鮮における農民層分解を統計資料にもとづいてみてきた。この小論で地域的な差異があることは確認できたように思われる。さらに、これまでみてきた個々の統計資料を詳細に吟味するとともに、その関連についても分析する必要がある（例えば、表20と表21との関連）、また統計資料にあらわれた変化のもつ意味や要因についても考察しなければならないが、すでに紙数もつきているので、これらについては今後の課題としたい。その際に、冒頭でも述べたように、農業地帯別の各農家階層の具体的な経営分析についても、地主制の存在形態や農産物の商品化の中心をなした米の流通機構やその価格形成の植民地的特殊性などに関連づけて検討してみたい。

(15) 朝鮮農家の地域別・階層別の流出形態に関する朝鮮全体にわたる調査はないが、南部の慶尚南道蔚山郡蔚山邑達里部落における35年10月の調査にもとづいた資料として、日満農政史研究会東京事務局『朝鮮農村の人口排出機構』1940年がある。また、日本への渡航については姜在彦『在日朝鮮人渡航史』（朝鮮研究所『朝鮮月報』別冊、1957年3月）、「満州」への移動については松村高夫「日本帝国主義下における『満州』への移動について」（『三田学会雑誌』第63巻第6号、1970年6月）などを参照されたい。

植民地期朝鮮における農民層分解

付表1 その他の道における農家階層別の自作地・小作地面積

道名	自作農(地主乙を含む)										自作地										小作地										農計										小作農																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
	年	自作農		計	自作地		計	小作地		計	自作農		計	自作地		計	小作地		計	自作農		計	自作地		計	小作地		計	田	畓	計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田		畓	田					畓	田	畓	田	畓	田	畓	田	畓	田	畓	田	畓																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
全	1934	12,081(7.1)	7,252(10.8)	19,332(8.1)	21,651(12.7)	13,067(19.4)	34,718(14.6)	52,060(21.9)	13,514(20.0)	38,546(22.6)	60,197(35.3)	26,581(39.4)	86,777(36.5)	98,277(57.6)	33,613(49.8)	131,890(55.4)	北	1937	11,903(7.0)	7,217(10.7)	19,120(8.0)	21,247(12.4)	34,255(14.4)	51,309(21.5)	85,564(35.9)	100,007(58.5)	33,884(50.2)	133,891(56.1)	慶	1927	28,880(16.9)	22,307(20.7)	51,187(18.3)	30,704(17.9)	29,109(27.0)	59,813(21.4)	89,929(32.2)	149,742(53.7)	48,809(28.5)	29,348(27.2)	78,157(28.0)	南	1928	25,216(14.6)	21,057(19.7)	46,273(16.5)	35,423(20.5)	26,734(25.0)	62,157(22.2)	77,209(27.6)	139,367(49.8)	61,826(35.8)	32,238(30.1)	94,064(33.6)	忠	1929	24,979(14.5)	20,960(19.8)	45,938(16.5)	34,872(20.2)	26,243(24.8)	61,115(22.0)	75,157(27.0)	136,272(49.0)	63,795(37.0)	32,145(30.4)	95,940(34.5)	南	1930	24,745(14.2)	20,325(19.4)	45,070(16.2)	34,684(19.9)	25,624(24.5)	60,308(21.6)	75,929(27.2)	136,237(48.8)	65,263(37.5)	32,341(30.9)	97,604(35.0)	忠	1934	24,303(13.6)	19,448(20.1)	43,751(15.9)	33,729(18.9)	22,806(23.6)	56,535(20.6)	73,555(26.7)	130,090(47.3)	70,863(39.8)	30,358(31.4)	101,221(36.8)	北	1934	17,787(10.9)	13,442(16.2)	31,229(12.7)	23,024(14.2)	17,877(21.5)	40,901(16.7)	54,915(22.4)	95,817(39.0)	84,996(52.3)	33,542(40.4)	118,538(48.3)	南	1937	17,530(10.7)	11,033(13.4)	28,564(11.6)	20,561(12.5)	16,894(20.5)	37,955(15.2)	47,069(19.1)	84,564(34.3)	91,609(55.8)	42,024(50.9)	133,633(54.2)	忠	1928	12,803(8.2)	15,151(17.1)	27,954(17.6)	13,845(19.7)	19,822(22.4)	33,668(21.2)	44,747(21.0)	66,204(41.7)	28,978(41.2)	35,736(40.4)	64,714(40.7)	北	1929	11,786(16.2)	14,169(16.1)	25,955(16.3)	12,876(18.1)	18,256(20.7)	31,132(19.6)	49,508(28.4)	65,939(41.4)	30,843(43.4)	36,439(41.3)	67,282(42.3)	忠	1930	11,809(16.6)	14,522(16.6)	26,331(16.6)	12,582(17.7)	17,830(20.4)	30,391(19.1)	49,602(21.9)	65,317(41.1)	31,183(43.8)	33,939(41.0)	67,122(42.3)	北	1931	11,365(15.9)	14,223(16.3)	25,588(16.2)	12,425(17.4)	17,135(19.7)	29,560(18.7)	45,414(21.6)	64,226(40.5)	32,145(45.1)	36,457(41.9)	68,602(43.3)	忠	1932	11,239(15.6)	13,936(16.0)	25,175(15.8)	12,121(16.9)	16,560(19.0)	28,682(18.1)	45,581(21.7)	63,627(40.0)	32,973(45.8)	37,121(42.7)	70,094(44.1)	北	1934	11,133(15.4)	14,015(16.2)	25,148(15.9)	12,086(16.8)	16,059(18.6)	28,145(17.8)	45,714(21.8)	62,290(39.3)	33,140(46.0)	37,804(43.8)	70,944(44.8)	黄	1934	17,337(12.7)	69,357(17.0)	86,693(15.9)	19,303(14.2)	77,461(19.0)	96,764(17.8)	121,102(22.2)	217,866(40.0)	71,667(52.6)	168,240(41.2)	239,907(44.1)	海	1937	19,024(13.5)	72,197(17.7)	91,221(16.6)	20,844(14.8)	79,035(13.4)	81,320(19.9)	89,296(21.9)	170,497(41.8)	72,255(51.2)	168,115(41.1)	240,370(43.7)	平	1930	17,077(20.0)	79,197(24.5)	96,274(23.5)	14,248(16.7)	67,072(20.7)	81,320(19.9)	89,296(21.9)	168,330(41.2)	156,062(38.2)	39,925(46.7)	156,709(38.3)	忠	1932	17,345(19.6)	78,620(24.5)	95,966(23.4)	14,602(16.5)	66,386(20.6)	80,387(19.8)	89,296(21.9)	170,497(41.8)	158,216(38.6)	41,155(46.6)	155,731(38.0)	北	1933	18,275(20.1)	79,042(24.8)	97,317(23.8)	15,211(16.7)	64,657(20.3)	79,867(19.5)	89,296(21.9)	170,497(41.8)	156,534(38.2)	41,457(45.6)	155,606(38.0)	忠	1934	18,532(19.8)	76,719(24.3)	95,251(23.3)	11,944(12.8)	45,341(14.4)	57,285(14.0)	68,685(14.3)	115,969(28.3)	49,912(53.3)	148,032(46.9)	197,944(48.4)	北	1935	18,211(19.6)	76,942(24.4)	95,153(23.3)	11,761(12.7)	42,668(13.5)	54,430(13.3)	68,685(14.3)	109,324(26.8)	50,291(54.2)	153,234(48.6)	203,525(49.9)	咸	1931	15,306(26.6)	149,614(43.3)	164,920(40.9)	15,078(26.2)	88,768(25.7)	103,847(25.8)	131,673(23.8)	178,401(44.3)	13,484(23.4)	46,315(13.4)	59,799(14.8)	南	1934	15,757(26.6)	160,622(44.9)	176,379(42.3)	15,058(25.4)	86,586(24.2)	101,646(24.4)	141,252(29.9)	149,085(41.7)	14,311(24.1)	47,708(13.3)	62,019(14.9)	咸	1934	7,352(44.9)	116,088(59.3)	123,440(58.2)	3,102(18.9)	38,156(19.5)	41,258(19.4)	23,887(12.2)	62,043(31.7)	67,938(32.0)	3,123(19.1)	20,807(9.8)	北	1937	7,966(41.5)	112,166(57.7)	120,132(56.2)	4,039(21.1)	37,571(19.3)	41,609(19.5)	24,868(12.8)	62,439(32.1)	3,686(19.2)	19,826(10.2)	23,512(11.0)

資料) 朝鮮総務府農林局編『朝鮮米穀要覧』1936、39年版、慶尚南道『農務統計』1931年版、忠清北道『農務統計』1932年版、平安北道『農業統計書』各年版、咸鏡南道『農業統計書』1933年版。

注) カッコ内の数字は、それぞれ畓、田、総耕地面積と占める構成比(%)。

付表2 その他の道における農家階層別の1戸当たり耕地面積 (単位;町歩)

道名	年	自作農(地主乙を含む)						自作地						小作地						農						小作農						平均						
		自作農(地主乙を含む)		自作地		小作地		農		小作農		平均		自作農(地主乙を含む)		自作地		小作地		農		小作農		平均		自作農(地主乙を含む)		自作地		小作地		農		小作農		平均		
		畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	畝	田	計	
全北	1933 ¹⁾	1.21	0.67	1.88	0.52	0.32	0.84	0.93	0.33	1.26	1.45	0.65	2.10	0.62	0.21	0.83	0.81	0.32	1.13	1.15	0.669	1.785	0.519	0.313	0.832	0.924	0.324	1.248	1.443	0.637	2.080	0.606	0.207	0.813	0.794	0.314	1.109	
	1934	0.609	0.471	1.080	0.328	0.311	0.639	0.672	0.290	0.962	1.000	0.602	1.602	0.319	0.192	0.511	0.583	0.367	0.950	1927	0.556	0.464	1.020	0.398	0.301	0.699	0.567	0.301	0.868	0.965	0.602	1.567	0.410	0.214	0.624	0.606	0.375	0.981
慶南	1928	0.559	0.469	1.028	0.387	0.291	0.679	0.542	0.293	0.834	0.929	0.584	1.513	0.425	0.214	0.639	0.590	0.362	0.952	1929	0.558	0.458	1.016	0.378	0.279	0.657	0.539	0.288	0.827	0.917	0.567	1.484	0.418	0.207	0.626	0.596	0.358	0.955
	1930	0.60	0.48	1.08	0.40	0.27	0.67	0.58	0.28	0.86	0.98	0.55	1.53	0.47	0.20	0.67	0.65	0.35	1.00	1933 ¹⁾	0.596	0.477	1.073	0.394	0.266	0.660	0.576	0.282	0.859	0.970	0.549	1.519	0.466	0.200	0.666	0.640	0.348	0.988
忠南	1934	1.01	0.76	1.77	0.49	0.38	0.87	0.79	0.39	1.18	1.28	0.77	2.05	0.61	0.24	0.85	0.80	0.41	1.21	1933 ¹⁾	0.998	0.754	1.752	0.488	0.379	0.868	0.781	0.384	1.165	1.269	0.763	2.033	0.606	0.239	0.845	0.792	0.404	1.196
	1934	0.656	0.777	1.433	0.285	0.408	0.693	0.304	0.366	0.670	0.589	0.775	1.363	0.431	0.531	0.962	0.518	0.652	1.170	1928	0.614	0.738	1.351	0.284	0.402	0.686	0.343	0.424	0.767	0.626	0.827	1.453	0.433	0.512	0.945	0.521	0.647	1.168
忠北	1929	0.613	0.754	1.366	0.277	0.393	0.669	0.344	0.425	0.769	0.620	0.818	1.438	0.418	0.482	0.900	0.508	0.626	1.134	1930	0.582	0.729	1.311	0.289	0.399	0.688	0.359	0.448	0.806	0.648	0.846	1.494	0.417	0.473	0.889	0.507	0.619	1.127
	1931	0.647	0.803	1.450	0.366	0.500	0.866	0.470	0.585	1.055	0.837	1.085	1.921	0.384	0.433	0.817	0.522	0.632	1.154	1932	0.63	0.80	1.43	0.41	0.55	0.96	0.54	0.63	1.17	0.95	1.18	2.13	0.37	0.43	0.80	0.53	0.64	1.17
青海	1933 ¹⁾	0.629	0.792	1.420	0.410	0.545	0.954	0.533	0.625	1.158	0.943	1.170	2.112	0.370	0.423	0.793	0.527	0.632	1.159	1934	0.50	2.00	2.50	0.35	1.43	1.78	0.52	1.71	2.23	0.87	3.14	4.01	0.55	1.22	1.77	0.62	1.80	2.42
	1934	0.491	1.963	2.453	0.350	1.406	1.757	0.510	1.689	2.199	0.860	3.096	3.956	0.516	1.212	1.728	0.595	1.780	2.375	1933 ¹⁾	0.334	1.547	1.881	0.298	1.403	1.702	0.297	1.267	1.564	0.595	2.671	3.266	0.452	1.322	1.774	0.435	1.648	2.083
平北	1930	0.330	1.496	1.827	0.400	1.819	2.219	0.418	1.698	2.116	0.819	3.517	4.335	0.391	1.087	1.478	0.428	1.559	1.987	1932	0.350	1.512	1.861	0.454	1.931	2.386	0.478	1.812	2.290	0.932	3.744	4.676	0.376	1.036	1.413	0.427	1.494	1.921
	1933	0.366	1.515	1.881	0.356	1.351	1.706	0.393	1.355	1.748	0.748	2.706	3.455	0.449	1.330	1.779	0.441	1.488	1.929	1934	0.360	1.522	1.882	0.359	1.304	1.663	0.385	1.293	1.678	0.744	2.597	3.341	0.447	1.361	1.807	0.440	1.493	1.933
咸南	1931	0.216	2.111	2.326	0.277	1.631	1.908	0.251	1.118	1.369	0.528	2.749	3.277	0.390	1.339	1.729	0.325	2.125	2.450	1932	0.239	2.440	2.679	0.281	1.616	1.897	0.265	1.166	1.431	0.546	2.782	3.328	0.292	0.972	1.263	0.352	2.121	2.473
	1934	0.17	2.76	2.93	0.17	2.24	2.41	0.16	1.38	1.54	0.33	3.62	3.95	0.26	1.45	1.71	0.23	2.74	2.97	1933 ¹⁾	0.166	2.625	2.791	0.161	1.980	2.141	0.145	1.240	1.385	0.306	3.220	3.526	0.222	1.254	1.476	0.211	2.524	2.735
咸北	1934	0.166	2.625	2.791	0.161	1.980	2.141	0.145	1.240	1.385	0.306	3.220	3.526	0.222	1.254	1.476	0.211	2.524	2.735																			

資料) 付表1と同じ。
注) 1) 未登録耕地を含む。